

俳句雑誌

令和二年六月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十三巻第六号

# 水 明

2020 6月号



《今月のかな女》

草踏めば沼へ螢の消えにけり

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

足を忍ばせ、しつとりと夜露に濡れた草を踏みながら、螢のいる方へ近づく。細心の注意を払ったのに、螢はすいーと沼のある方へ飛び去ってしまった。この俳句が詠まれた場所は定かではないが、かな女の住まいの近くとすれば、今では想像の及ばぬ自然が多く残っていた東京の景観が浮かんでくる。

(鬼之介・註)

— 華の一句 —

総帆展帆「ごきげんよう」と燕来る

丸山マスマ

総帆展帆そうはんてんぱんとは、帆船の全ての帆を広げることで、かつて練習船であった日本丸や海王丸では、訓練生が帆柱に登って作業した。真青の空に、純白の帆が映えて実に美しい。筆者が敬愛する三橋敏雄氏が、練習船・日本丸のパーサーであったので、この話をよく聴いた。

(鬼之介・推薦)

# 水 明

令和2年  
6月号

今月のかな女

華の一句

邸宅(作品)

時の疫(近詠)

庭の花つくしⅡ(近詠)

冠木門 主宰作品の鑑賞

硯箱 季音月評

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

鼓笛集(同人作品)・私の一句

現代俳句鑑賞

俳誌望見

句集喝采

山本鬼之介

茂木和子

永野史代

境延昭

井口俊晴

大橋 廼代 大村 節代  
栢尾 さく子 ほか

田寺 玲子 柚木 治子  
小倉 倭子 ほか

松井 由紀子 梅澤 佐江  
井上 玲子 ほか

網野 月を

梅澤 佐江

近藤 徹平

1

4

6

7

8

10

12

18

23

28

28

27

65



☆水明賞受賞者ノオト

○自選二十句

正木 萬蝶

30

夏の蝶

永野 史代

32

○自選二十句

近藤 徹平

34

竣功を祝う

境 延昭

36

○自選二十句

大塚 茂子

38

未来における可能性

山中 順子

40

水明集

青木 鶴城 野田 静香  
日高 徹 ほか

42

水明集作品評

山本鬼之介

56

水 琴 窟 (水明集四月号鑑賞)

池田 雅夫

60

水明例会報・各地句会報

66・68

夏季競詠作品募集

55

夏行のお知らせ

73

水明発展基金御礼・風声・後記

73・72・74

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

---

---

邸宅

山本 鬼之介

兄よりも妹つよし  
蛸蚪の紐

乱取りの猛き乙女ら  
薄暑光

蠟石の落書の  
みちち若葉風

---

---

---

絵 莫 塵 も 半 値 廃 業 近 き 荒 物 屋  
鞭 声 は た だ ご と な ら ず 新 樹 邸  
赤 心 に 微 か な く も り 黒 ビ ー ル  
夕 風 や 裏 木 戸 あ け て 按 摩 さ ん  
日 の 本 に 乱 い く 度 ぞ 松 落 葉

# 時の疫

茂木和子

荷を解きて木瓜の朱色の目に痛し  
ぐづり泣く赤子に木瓜の花あかり  
天蓋に似て幽かなり藤の風  
春雷や人の手少し借りて生く  
夏館エアープラント咲く窓辺  
時の疫の「三密」ごもり夏ごもり  
アブチロン咲く門灯に守宮鳴く

コロナウイルスの緊急事態宣言が発令され、不要不急の外出禁止令が出されているにもかかわらず大型店舗の一部や園芸店では、意外にも賑わっていると云う。在宅勤務や休校を強いられている反面、家族との共有時間が多くなった事に一因があるらしい。菜園や花を愛でる人が多くプランターや土、そして売られる色々な野菜苗、取り取りな花の苗。しかし会計には長い列、ここだけには二米間隔に黄色のテープがしっかりと貼られている。「三密」の何かが崩れている。一日も早い終息を願うばかりである。



# 庭の花づくしⅡ

永野史代

二葉葵の恥ぢらひの花葉隠れに  
黄に徹しをり芽キャベツの花ざかり  
木香薔薇反乱のごと傾れをり  
強心剤とはジキタリスの花うすももに  
空へちりばむ勿忘草のブルーの恋よ  
源平菊の末裔はいろやさしかり  
ラベンダーの花の袋を枕辺に

よい季節が巡って来たが、家に籠り庭の花々を眺める毎日。五月一日はFête du muguet（鈴蘭の日）昔、仏国の街角に立った青年が、鈴蘭はいかが？と売っていたのを思い出す。勿忘草は、忘れない、覚えている。思い出す事と知った青春時代。上賀茂神社の側で買った二葉葵は健在、地面まで広がっている。どの花にも思い出深い物語がある。世界中の新型コロナウイルスが収束し、元の生活に戻りたいと願う日々である。

# 冠木門

● 主宰作品の鑑賞

境延昭

三月号

琴爪やいつのまにやら春の雪

琴爪は琴を弾く際親指、人差し指と中指に装着する。象牙などで奏者の指に合わせて作り、それぞれ拘りの道具のようなものである。上五の「や」に愛着の気分が読み取れる。中七の話し言葉のような措辞には琴を弾き終えた充足感がある。弾き終えて琴爪を外すその時に初めて気付く春の雪であったと解する。「琴爪や」によって琴の奏者になり切って詠まれている。俳句は文学、虚あつてこそその文学である。

下萌や仙洞御所はこの辺り

辞書に頼れば、仙洞御所は上皇の御所。又、仙洞は不老長寿の仙人の住居の意とある。今実在の仙洞御所と言えば、京都御所南東にある後水尾天皇から孝明天皇まで使われた御所がある。上皇が実在し皇居に居座られる現在、一見さりげないこの句は重い。今を生きる者として、その社会を背負わざるを得ない。嘗て「あやまちはくりかへします秋の暮」を詠んだ三橋敏雄を識り敬愛する作者である。

何時になき女医の横顔春の風邪

作者の所謂ホームドクターは女医さんであろうことが、読み取れる。最近の若い医者にはひたすらパソコンの画面を見て、聴診器すら使わない。ホームドクターの女医さんは、患者である作者の顔色からその表情まで些かの変化も見逃さない丁寧な診察なのであろう。それ故に作者も女医の表情を決して見逃さない。細細と説明せず、「何時になき女医の横顔」の措辞にその信頼感が分かる。

春の風邪の女医それを診立てたのが患者たる作者、その主客転倒が面白い。

虚無僧の現れさうな夕霞

今は時代劇のシーンでしか見られぬ虚無僧。元は禅宗の一派普化宗の僧の形であったとか。普化宗そのものは明治初期に廃宗されている。有髪で深編笠、小袖に丸ぐけ帯の着流しで有刀、尺八を吹き諸国を行脚する。探索の忍びの者か武芸の修行者か、何か翳を背負った人物を想像する。芝居が好きで特に時代物に詳しい作者、夕霞の中でいきなり江戸時代に

タイムスリップしているに違いない。

#### 四月号

#### 薄氷を八咫鏡に屋敷神

八咫鏡は天照大御神が天岩戸に隠れた折、石凝姥命いしこりどめのみことが作ったとされる鏡。伊勢神宮内宮に奉斎されその模造品が三種の神器の一つとして皇居賢所に安置されているというが、見たことではない。時空を超え、記紀の神話伝説への飛躍は驚きである。中七の助詞「に」は「…になぞらえ」が省略されている。

#### 内弟子の伏目の応へ春の雷

俳句結社の主宰である作者に内弟子は居ない。住込みで家事や身の回りの世話までしてくれる内弟子、作者の願望かもしれない。内弟子が伏目になるような主の行為にあぶない場面を想像させる。その場面にびたりと決まる季語「春の雷」である。

#### 鉄火肌蛇の目にかくし春時雨

鉄火肌とは俠気に富んだ気質のこと、俠気はおとこぎで普通は男に対して使う。男気のある作者が自身のことを詠んだとも取れる。しかし、句にまとわる色気は間違はなく女のも

のである。浅草か向島あたりの姐さんか、べらんめえの気つ風のない啖阿が聞こえてきそうである。

#### 無粋にも乙女椿を囲ふ堀

園芸種で淡いピンクの花を咲かす乙女椿。屋敷の庭の乙女椿、堀で囲うなんて無粋なこと。先ずは素直な解釈、しかしそれでは「無粋にも」「囲ふ」が許さない。「芸事や遊興に通じた粹人だったら、囲うものが違うだろうに」との作者の眩きが聞こえそうである。

#### 花ぐもり松の位の遊女塚

松の位とは、最上位である太夫職の遊女の異称。容姿に優れ、歌舞音曲は当然のこと詩歌など文芸にも通じた教養人でもあったようである。大名、旗本にも伍した社交界の花であつても傾城の身、それなりの出自や過去を背負つた人生であつたに違いない。そのような思いに駆られる「花ぐもり」である。

吉原近くに昔遊女の投げ込み寺と言われた所で「吉原総霊塔」を見たことがある。しかし句に詠まれた遊女塚の所在は知らない。

権勢を誇つた遊女と思しい塚であろうか、それとも死ねば只の人普通に見る土饅頭かもしれない。どちらでも読み手が勝手に想像すればよい。

# 硯箱

◆季音四月

井口俊晴

ノックせし書齋は無入春の雪

菊池ひろこ

春の雪がしんしんと降っている。暖かな日が続き、やれやれと思っていたのに、未明から降り始め、昼過ぎた今は庭も通りもすっかり白くなっている。そう言えば、家人の姿をまだ見ていない。休日だから寝坊をしているのだとばかり思っていたが、そうでもない様子。試しに書齋のドアをノックしたら返事もなく、室内はもぬけの殻。いったい何処へ行ってしまったのだろう。素敵なヒロインと、その夫をめぐるミステリアスなドラマが始まる。

雪催舷灯揺らぐ船溜り

五明昇

三陸の小さな漁村だろうか、空はどんより曇り、今にも雪が降ってきそうだ。打ち寄せる波が、ペンキの剥げた漁船の船べりを叩いている。海の男の朝は早い。まだ薄暗い甲板に投げ出された漁網やロープを担いで、出漁の準備に余念がない。そんな男の横顔を、緑と紅色の舷灯がゆらゆらと照らし

出す。雪が降らなければよいのだが、一瞬頭をかすめた心配を振り払うように男は頭を振る。少し離れた所に係留している仲間の船もエンジンをかけ、直に出港しそうな気配だ。詩情あふれる漁港の風景。

一枚の空斜に唸るいかのぼり

山中順子

早春の凍てつくような河原。空は抜けるように碧い。吹く風は赤城風。びゅんびゅん音を立てている。その時、一枚の風が天に向かって、大空を斜めに切り裂くように上がっていくのが見えた。「烏賊幟」と呼ばれる伝統的な風で、子供に人気の、アニメを描いた軟弱なタイプとは異なる、古武士のような風である。強い風に逆らって唸りを上げ、ぐいぐい上っていく。四角い空間を三角に切る、幾何学の図形問題を解くみたいな爽快な情景である。

鶉の瀬へと千の松明春の月

鳥羽和風

奈良に春の訪れを告げる東大寺のお水取り。暗闇の二月堂

の前に立ち、真つ赤な松明の炎と飛び散る火の粉に興奮した人は多いだろう。そのお水取りの「香水」は、なんと若狭から「お水送り」の神事によって、時空を超え、遠く奈良の若狭井へ、十日もかかって届くと信じられてきた。この夜、若狭・神宮寺の井戸で汲まれた香水は、山伏姿の行者や、白装束の僧侶ら三千人の松明行列に守られ、二<sup>キ</sup>上流の鶺鴒の瀬まで運ばれ放水される。お水取りから遡ること十日、三月二日の莊嚴な神事の夜である。

## 七草の二種は庭へと摘みに出る

町野 広子

正月七日、七草粥を炊く。私などはスーパールのパックになった「七草セット」を買っているが、作者はとも違う。二種は庭に生えているから、それをじかに摘むというのだ。その方が風情があるというものだが、さて、二種とは何だろうと考えた。スズナ（蕪）やスズシロ（大根）だと間違いなさそうだが、庭には生えていないのではないか。迷った末、セリ（芹）は真つ先に当確、あとはナズナ（ぺんぺん草）かなと考えた次第。正解は何でしょう？日本情緒だけでなく、クイズの楽しみもある句となった。

## 犬一匹通らぬ朝の寒戻り

白井 由美

寒い。もう春だというのに、この冷え冷えとした空気はな

んだ。朝刊を取りに外へ出たが、道を歩く人の姿はない。いつも決まった時間に玄関前を通り、柴犬の散歩をする老人、その犬仲間のチワワと娘さん。誰も歩いていない。そんな寒戻りの情景を、「人っ子一人通らぬ」と言わず、「犬一匹通らぬ」と表現したところが、自他共に認める愛犬家の作者らしいと、ニヤリとしてしまった。

## 竹林は勝者の叫び北風

秋山 冷子

散歩でよく通る見沼たんぼの川べりに竹林がある。ちよつと風がある日には、太い竹がしなるように揺れ、竹の葉がざわざわ音を立てる。であるからして、北風の日などはどうなるか。密集した竹同士がこすれ、ゆさゆさと左右に傾きながら叫びを上げる。その様子は戦いに勝った者が上げる勝鬨のようだ。

## ピザ窯の炎のどけし茶房かな

野口 和子

ガラス越しの春の日を浴び、仲の良い女友達とコーヒーを飲んでいる。店内には煉瓦でこさえた小粋なピザ窯があり、ピザが焼き上がろうとする時の、チーズが焦げた旨そうな香りがしている。ふと窯を見ると、鉄板の隙間から赤い炎がゆらめいている。そのせいで部屋が暖まって、このまま眠ってしまいたくなる。幸せな午後のひと時である。

季  
音  
雪



花吹雪 大橋 廸代

一山の嘯りさらふ天狗風  
安珍塚にいま乱声の花吹雪  
句を記す指の芯までさくら冷え  
鳥・虫・人叫びたくなる山櫻  
養花天腰鼓うち舞ふチマチョゴリ

山鳴らし 大村 節代

乱れ髪の傀儡の笑まふ春の宵  
LPの古傷愛づる春裕  
乱取の足技決まる暮の春  
赤シャツと見紛ふ男糸柳  
山鳴らし合切袋に塩むすび

花の雨 栢尾 さく子

往時茫々 五明 昇

海原に勲は亡び桜鯛  
再びの春や故郷の花黄心おがたま樹  
友亡くて麻雀荘に花の雨  
怒り頂点卵白の泡角立ちて  
陽炎の土中で焦ぐる火打石

たんぽぽや丘の風車の怠け癖  
燕来る吾が通ひ路の駄庇  
雲雀笛野良にお八つの届く頃  
山寺に強訴の謂れ葱坊主  
俊寛の小さき奥つ城鳥雲に

桜餅 菊池 ひろこ

開かずの窓 境 延昭

桜餅刀自に老舗の戸の重さ  
人間もやはき葉を食み桜餅  
遠柳蘇州生まれと聞き及ぶ  
柳絮とぶ堀端かつて占領下  
行く春の薬局に文字翻へり

少年の開かずの窓や雲雀笛  
花吹雪会津はいまも城を守る  
女子寮の囲ひ飛び越え散るさくら  
デザートの大福二つりらの雨  
うららかや競輪場へシヤトルバス

リラの冷え

椎野美代子

花見酒

鈴木康世

化粧水肘を伝はるリラの冷え

姫鏡台合せ鏡もリラの冷え

リラ冷えやたたみいわしの目がこはい

勾玉の形に寝につくりリラの冷え

リラの冷え水を束ねてしまつたか

遅 桜 島津初花

ももいろの 永野史代

辛夷咲き呼び起こさるる野良仕事

祝ひ日や海の香も盛る蒸鱧

若狭湾穏やかな日の蒸鱧

山寺の鐘 訝して遅桜

楊貴妃のその名たたふる遅桜

石垣に遺る刻印鳥雲に

ジビエ料理に耳傾くる昭和の日

恙なく生き来て米寿さくらの夜

はたと気づく記憶違ひや夜半の春

可惜夜を写真の夫と花見酒

試着室のカーテン揺らす春一番

かの人に優しさ戻る春の虹

消えさうな恋一つあり春の虹

見えぬウイルス消してたもれよ春の雪

中空にももいろの帯さくら咲く



花ぐもり 波多野 寿子

間を置いて閨の戸叩く春しぐれ  
ガラスの造花そつと拭きぬる花ぐもり  
城の町学舎浮かして花の雲  
子に叱られる歳になつたよ春日和  
しだれざくら手を握り合ふ道祖神

七 曲 り 星 野 和 葉

乱れ書きのメモを残して花の旅  
山藤の続く峠よ七曲り  
「売物件」の奥に藤房みえかくれ  
鳥の巣や婚調ひし隣の娘  
もぞもぞと又もぞもぞと小鳥の巣

微 風 茂 木 和 子

巣づくりの鳥がざわめく鬼瓦  
鳥の巣にどこぞのハンガー組み込み  
何鳥の巣か水色の命二個  
巣ごもりの鳥にそよ風揺籃歌  
鳥の巣を見上ぐる首の美しき反り

春 の 星 矢 作 水 尾

明日を待つはちみつ色の春の星  
限りなく空を満たせり春の星  
ひとふしの調べのやうな落花かな  
初花の一枝挿したる縁起棚  
消ゆるまで箒にもたれ春の虹

若葉風 山中順子

蘭 春 由良 ゆら女

あいまいな病院食の味さくらもち  
城址を一薙ぎ払ひ若葉風  
貸本に葉が頁を藤若葉  
いつまでも日の当たるところ桜の実  
夕告げのチャイム韻引く桜の実

オーロラや磯巾着の無重力  
さへづりて小枝のかげのゆれ止まず  
嵐峡に棹と競へり花筏  
大河の風に呼ばれて散るさくら  
歌舞伎はね街凹凸の夕霞

惜 春 山中 みどり

信濃の恋 吉住 光 弥

北斎の疫病退治図春惜しむ  
大川端芽柳に吹く疫の風  
夜桜やうしろに人の居るやうな  
墨堤は言問団子花吹雪  
竹籠に墨堤名物桜餅

疫病禍<sup>えびみ</sup>やみぬち風吹く暮の春  
暮の春電池切れなる体温計  
神霊の使ひや古墳<sup>か</sup>に揚雲雀  
中天の舞や見得切る告天子  
花杏信濃の恋はありつたけ

諦めぬこと 網野月を

桜 餅 石山かつ子

紋白蝶白い花には近寄らず  
春曆インクの消せるボールペン  
今はもうだあれもない木の芽風  
てふてふの止まるまで見て無心  
折るとは諦めぬこと染卵

飛花落花水屋の先の囲ひの間  
散る桜森鷗外の玻璃戸にも  
妙齡と馬齡 鬢 鑠 桜餅  
浅草の雨も明るし桜餅  
最澄の散華ひらひら八重桜

(順送り)

雲雀野 石井喜恵

雲雀野の道は空へと向かひけり  
子の文に合はせ膝折る春の虹  
ペンギンのまあるき胸に春の雪  
花杏また読み返す姉の文  
街おぼろ人影のなき交差点

☆

☆

# 季音月

春 灯

水音のひびく白日風光る 田寺玲子

薫風やひしほの匂ふ城下町  
 囀の中の図書館窓光る  
 影ゆるる一差の舞春灯下  
 春陰や抗菌グズあれこれと

小町井戸

柚木治子

ワイングラス温めをれば春の雷  
 春野ゆく名のみ遣りし小町井戸  
 一人静水琴窟の暗がり  
 卒業や祖父に届くる大吟醸  
 石庭に桜薬降る黙の刻

さくら今季

小倉倭子

産声を弾き出すかに初ざくら  
 青空に意気揚揚と朝桜  
 見はるかす窓一面に花の里  
 お忍びや枝垂桜に匿はれ  
 坂道を登り詰むれば八重桜

無人駅

鳥羽和風

春の風寝具叩いて膨らます  
 春祭禊の海のほんだはら  
 蝶二尾乗ったか知れず無人駅  
 桜散る大鳥羽三宅新平野  
 親指は鰻の頭「よお歌丸」

水送り

宇田白鷺

赤赤と水は火を練る水送り  
 法螺を吹く僧に火の粉や送水会  
 水送り終へて無口の人つづく  
 ふらここやゴンドラの唄蘇る  
 牛飼ひの消えて久しや草若葉

風と遊ぶ

丸山 マスミ

気の合ひし風と遊べり揚雲雀  
ブルペンより伸び行く白球風光る  
麗かや置竿のままうとうとと  
三味の音のまつたり届く春の昼  
総帆展帆「ごきげんよう」と燕来る

流 鶯

森田 祥絵

鳥雲にいちにち光る鳥灯台  
放牛の黒の光沢鳥雲に  
コロナ籠りの換気の窓に桜散る  
櫻葉降るきしみて過る乳母車  
流鶯に向かう三軒華やげる

鳥雲に

藤澤 喜久

蠟石を探す河原や鳥雲に  
旋回は別れの合図鳥雲に  
カラー百本ショーウインドーの国産車  
葱坊主此処は昭和のニュータウン  
肩揚げを下せし十五のさくら貝

春 陰

渡辺 舍人

春陰やアダムも肋骨失へる  
さくら咲く猫の太郎が中つ枝に  
春宵やひとりで喰らふ精げ米  
日のあたるとこの仕合せチューリップ  
かたまれば少女となりぬ花の下

春野行く

高島 寛治

春雷や声を潜むる電話口  
母の手の届かぬ先へ卒業す  
杏咲く信濃の夜は嫺やかに  
春野行く踏んではならぬ草を避け  
麗かや鳩はくぐもる声を立て

雲 一片

池田 雅夫

心はや五月の風に舞ひ上がり  
町娘 脱皮のごとく更衣  
錆びつきし武者人形の太刀手入れ  
隊列のあれよあれよと卯浪かな  
麦秋や東へ逸るる雲 一片

関所跡 松本光子

山藤の短き房や関所跡  
関の藤首のしづくも濃紫  
藤の花二人で渡る太鼓橋  
旧家の林来たか巢鳥の胸白し  
ポンプ井戸寺の山藤白く咲く

春嵐 井上燈女

また一軒廃屋となり葱坊主  
子には子のやり方のあり種浸し  
苗床へ手を入れ息を確かむる  
一握の土ある所草芽吹く  
耕運機を横倒しせし春嵐

旅立ち 町野広子

父と酌む明日旅立ちの春休み  
別れあり出会ひもありて春休み  
いぬふぐりグーチョキパーであいこでしよ  
春の虹再会果す母校前  
鯉五郎目線の先に鳥の影

花の下 白井由美

西行の歌口ずさむ花の下  
花曇り子供等の声無き校庭  
参道の立ち樹伐採され四月  
一羽発ち次々追うて鳥雲に  
青き踏む富士を遥かに丘住まひ

春籠る 森本早苗

花冷やコロナの影のいつ消ゆる  
じつくりと志ん生嘶春籠る  
篝火の欲しぼんぼりも紅枝垂  
愛しきは二〇二〇を散る桜  
花ミモザ背景に置く空の青

春の虹 内田恵子

渡せないままの文あり春の虹  
柔らかな赤子の吐息春の虹  
原っぱに転がるタイヤ揚雲雀  
ミモザの黄カナリア歌を思ひ出す  
乱歩邸に猫入らむと花ミモザ

囀り 十倉和子

囀りに足を止めたる赴任校  
音読の子らに負けじと囀れり  
囀りの沸騰点の男坂  
花冷のグラントピアノの薄埃  
旅立ちの西行と逢ふ花明り

ウイルス 荒井俱子

風光る孔雀は羽を全開に  
宇宙への少年の夢葱の花  
花筏そろりとわけて渡し舟  
眠気さす鐘の余韻や遍路宿  
ウイルスの話などして桜餅

鳥雲に 岡野順子

鳥雲に入る荒川の河川敷  
鳥雲にテールライトの登り坂  
鋭利なる包丁塚や鳥雲に  
こくりこくりと車中春眠肩を借り  
茎立ちや落日に身の細りかな

躑躅 川野妙子

芽吹く葉の生き生きとして大櫛  
子等の声風に乗り来る大櫛  
公園を囲み色づく躑躅かな  
おだやかな一日すごして白つつじ  
春灯や昔昔の思ひ出を

春の雨 川崎道子

シャッターに廃業貼紙春の雨  
山桜十人に減る児童数  
薬草園の隅に毒草さくら冷  
囀りの真つ只中をペアルック  
九回裏の場外ホームー雲雀東風

コロナ禍 伊藤敦子

囀や大樟を揺らすほど  
コロナ禍や出番のなくて花筵  
春逝けり蟄居の吾れは体操す  
花筏割りてぽつかり鯉の口  
穀雨かな歩ききれずに一服す

垂れ桜 加藤 むら子

垂れ桜 学徒 動員 されし 寺

子が 描く 桜の 花の 晴れ 姿

菜の花の 堤を 唱歌うたひつつ

蜂の 巣の ある 酒蔵の 大庇

世情いま 混沌として 花の 無垢

春 深む 井関 礼子

昨今の 花の 戸惑ふ 季の 乱れ

蕨長く 世事に 阻まれ 呼ばれても

騒めきし 世情に 籠り 春深し

餞の 一封 贈る 初 燕

☆ ☆

日本現代詩歌文学館は、  
 全国で唯一つの詩歌専門の総合文学館です。  
 日本の明治以降の詩歌資料を  
 有名無名にかかわらず収集・保存し、  
 様々な活動をおして  
 詩歌の現在を発信しています。

〔贈賞式〕

5月23日(土) 15時  
 日本現代詩歌文学館 講堂  
 \*開催予定・最新の情報は、ホーム  
 ページ等でご確認ください。

〔俳句部門〕  
 鍵和田 柚子  
 『火は禱り』

(角川文化振興財団)

〔短歌部門〕  
 花山 多佳子

『鳥影』(角川文化振興財団)

〔詩部門〕  
 藤原 安紀子

『どうぶつ の 修復』(港の人)

第35回詩歌文学館賞

展覧 30周年・2020年度日本現代詩歌文学館常設展  
 2020年東京オリンピック・パラリンピック開催記念  
 われ、敗れたり  
 一敗北と失敗、あるいは挫折と復活の詩歌—



オリンピックイヤーの今年、詩歌を通して、  
 あえて無数の敗者の声に、耳を傾けます。  
 (2021年3月7日まで)

◆◆◆  
主なイベント開催予定

こどもの俳句教室 6月~10月  
 こどもの詩のワークショップ 8月  
 短歌入門講座 8月~9月  
 俳句入門講座 8月~9月  
 第17回俳句まつり 11月  
 古典文学講座 11月~12月  
 俳句実作講座 1月~3月

日本現代詩歌文学館

024-8503 岩手県北上市本石町 2-5-60 Tel 0197-65-1728 Fax 0197-64-3621  
 URL <https://www.shiikabun.jp> E-mail [shiika@shiikabun.jp](mailto:shiika@shiikabun.jp)

〔開館時間〕 9時から17時  
 〔休館日〕 12月から3月までの  
 月曜日および年末年始  
 〔入館料〕 無料



# 季音花

チューリップ

松井由紀子

屈託の日の赤すぎるチューリップ  
開ききりもはや戻れぬチューリップ  
春寒の予報明日も明後日も  
人気なき街を自在に桜まじ  
春昼や沼に尺余の魚の影

恋ごろも

梅澤佐江

春装は貝紫の恋ごろも  
楚楚として鎖骨の透ける春の服  
聖女とも墮天使かとも白椿  
糸柳シフォンのドレスたをやかに  
遠柳小雨にけぶる戻り橋

花杏

井上玲子

穂高嶺は遠くに光り花杏  
揚雲雀空に広がるコロラチュラ  
山肌は柱状節理霞立つ  
春の雪明かりにひらくリルケの詩  
白牡丹供華とし香り分ち合ふ

国難

原田想子

鉄の柄に艶蘇る弥生かな  
初蝶の一途な動き吾も立てり  
親鳥の巣立ち促す声の艶  
雨意の風淡き彩生む藤の棚  
国難の大きな憂ひ春遅遅と

胡蝶

松宮保人

碧空に飛行機雲や花辛夷  
巢燕の客に馴染みし無人駅  
漂着物を白く晒して春の海  
ランダムに舞ひたる胡蝶見て飽きず  
山頂の足湯を撫づる春の風

飛鳥路 野平 美紗子

飛鳥路や鐘の音さへ臈なり  
面長の飛鳥大仏春の昼  
石舞台の幼き記憶春の闇  
まほろばの大和は今し紫雲英の田  
偶に来て大和三山春の虹

松の花 森川 義子

雲抱く湖面の山や桜狩  
飛花落花己が影踏む石畳  
落花浴び一灯もなき六地藏  
句碑囲む石に貌あり松の花  
火の川となるや古刹の落椿

夜桜 山田 美佐尾

薙刀を物せし祖母や鐘臈  
染井吉野の開花を見むと大鳥居  
流鏝馬の砂塵と落花入れ替はる  
夜桜や王将守る囲ひ駒  
永き日や白壁を塗る左官の手

鳥雲に 大場 順子

祇園の血引く舞姿花の宴  
マトリヨーシカを取出す遊び鳥雲に  
真夜に聞く春雷ごろとそれつきり  
群れ咲きて孤高の一人静かな  
揚雲雀声きらきらと一行詩

春が来た 井口 俊晴

肩寄せてベンチに二人春の暮  
女優さん真似てくるくる春日傘  
屋根滑りもんどり打つて春の雪  
葱坊主背の高い子も低い子も  
沈む日や横一列に葱坊主

花の雲 菅原 知子

花の雲窓から見ある五時間目  
女丈夫の三人寄れば柏餅  
絹縫ひ針の穴は小さし糸柳  
針箱のメモ書きどほり露味噌を  
担任は新人教師竹の秋

電子辞書

福田千春

葱坊主ひとが離れて並ぶ世に  
電子辞書買うて社会人入学す  
出勤の佳人小走り夜の柳  
揺るるたびチワワ戯れつく糸柳  
鯨五郎の渴を分かつや鉄の板

櫻東風

後藤綾子

道化師の素顔かなしや養花天  
飛花落花人それぞれの息を吐く  
暗がりに声をひそめて花見酒  
木瓜の花心晴れぬ日何時までぞ  
櫻東風点が機影となりて過ぐ

桜餅

野口和子

野の色となりし豆腐は蓬入り  
春惜しむレコードあまた天袋  
葉桜や流行る肺炎収まらず  
小包の隅に手作りマスクかな  
会計監査済みて頬張る桜餅

花水木

中野

彊

散策の人に歌あれ朝桜  
うす紅の日毎に高き花水木  
通行止知らぬ顔して花水木  
朱の靴の紐を結びて春の風  
衛兵の歩調で出勤つつじ燃ゆ

種袋

矢島

清

艶めきて高遠城の若葉かな  
藤の花監視カメラと体温計  
種袋土に置かれてふくらめり  
春の田に怠けて牛のうごかざる  
にぎり飯海苔とうめほし山遊び

がん

宮崎雅訓

がん入院咲き頃の花眺めをり  
がんセンター窓広広と春を入れ  
完治するをゆるり待ちをり朧月  
春の日や病窓往き来新幹線  
退院の日は葉桜となりにけり

虫籠窓

上戸 千津子

春やぶらり因幡街道虫籠窓  
楚々として「クルス紋章」花大根  
世は花時コロナウイルス無かりせば  
母衣背負ひ鶉越に熊谷草  
沈丁散り地上絵残す銀河群

ピアノ

秋山冷子

春短し司祭バイクでジーンズで  
春埃明日売られゆくピアノ  
幸せは手の平サイズシヤボン玉  
パリコレも黒は根の色蝌蚪の色  
かげろふや摺み所のない話

沈丁花

松山清子

テレビ消し沈丁香るひとりの夜  
丸文字の葉書来たれり雲雀東風  
地藏堂の清めが終はり鳥交る  
母衣背負ふ徒兄弟逞し和歌祭  
多血症と言はれ血を抜く春愁

パラグライダー

西浦 千枝子

パラグライダー地を蹴つて発つ若葉山  
つやつやの嬰の頬つぺや柿若葉  
両手広げ爺にかけ寄る入園児  
亡き夫にコロナを語り豆の飯  
花散らさずコロナ散らせて弥勒さま

☆

☆

# 俳誌望見 梅澤 佐江

『若竹』 令和二年三月号 通巻一〇五五号

主宰 加古宗也 発行所 愛知県西尾市

昭和三年六月、富田潮児が西尾で創刊。師系村上鬼城、富田うしほ、富田潮児。「確かな感動とともに生きている証としての俳句をめざす」を理念とする。(月刊)

主宰句「流水抄」(387)二〇句より

綿虫のゆつくり飛んで真日に入る

かがよいながら飛んでいた綿虫が何時しか日の光の中へ紛れ行くのを見届けている作者、(真日に入る)の座五に生きとし生ける物への眼差しの温かさを感じる。(真日)の措辞を得て格調高い趣に。

信篤き人こそ男飄々忌

尾崎士郎の「人生劇場」の青成瓢吉に因んだ飄々忌、義理と人情に溢れた作風は正に信篤きに相応しい。飄々と確たる自分を持つていたいものである。

士郎忌の閻魔やさしき目を持ちてり

酒と相撲を愛した士郎の庶民的な人柄は誰にも好かれた由、きつと彼岸でも閻魔様の良き審判が下されたのである。

足助には蔵持ち多し古代雛

塩の道伊那街道の足助宿は、足助塩や物資輸送の中継地として大いに繁栄した。今も残る漆喰の蔵や家並、飾られている古代雛に当時の商家の面影を重ねている作者である。

鐘楼に高き階あり梅の風

夕風に匂やかな梅の香が。梵鐘を聞きながら鐘楼の高いきざしを見上げる。閑かな刻の流れの中で余情に満ちた風景に心惹かれる。

青竹集 一一名 各五句より 二名を一句ずつ

淑風満つ家紋の箸の添へてあり

中井 光瞬

虎落笛吹き地下壕七曲り

渡邊たけし

翠竹集Ⅰ 五六名 各三句より 二名を一句ずつ

凍てし夜の救急搬送車より電話

重留 香苗

一日終へじんわり浸みる熱き燭

新部とし子

翠竹集Ⅱ 五二名 各三句より 二名を一句ずつ

寒暁や地震の一瞬知らざりき

堀口 忠男

天領の句碑の緑や星冴ゆる

鈴木 帰心

人間風詠を軸に生きている証の俳句の中に、紛れもなく自身がそこに存在しており、喜怒哀楽を余情を持って感性豊かに詠まれている。

真珠抄 雑詠 二一四名 主宰選 三句紹介

男らのエプロン厚地大根切る

鶴田 和美

冬日さすどれも無人の観覧車

鈴木 恵子

負けん気の子の二人ある絵双六

田口 風子

全同人二一四名の雑詠各五句より主宰が選句し、上位選の八句には(選後余滴)として二頁にわたり丁寧な選評が添えられて全同人を鼓舞している。

今号に乙部妙子氏による「若竹新春俳句大会」報告が書かれているが、本年の行事表を拝読すると、ほぼ二ヶ月に一度俳句大会が開催されており、「若竹吟社」が心を一つにして歩まれている事を痛感した。

# 現代俳句鑑賞

## 網野月を

### 鉄瓶と文火ねんごろ春隣

八田 夕刈

〔俳句四季〕4月号・文火より

「文火」に「鉄瓶」が温められている。その様を「ねんごろ」と叙したのである。二つの物の関係性が表現されていて、将に座五の季語「春隣」なのである。ここまで両者の密着度がいかにしつかりとしていれば、付き過ぎというような批評は論外であろう。他に「狼狽の色はなにいろ兎抱く」がある。

### そっいわれハマユウという花が咲く

山口木浦木

〔俳句四季〕4月号・風土を詠む、宮崎より

中七の季語「ハマユウ」も「花が咲く」も実際の物であるのだが、「そっいわれ」は観念を引き出しているように読める。事柄を引き出しているのだ。と言いながら句として非常に魅力的な表現になっているのは、「そっいわれ」と「ハマユウ」の語呂が似通っていることと、浜木綿のイメージにも重なるものがあるからである。

「風土を詠む」というテーマのもとに集められた句の一句である。昨秋、筆者は現代俳句協会の九州大会に参加させて頂いたのであるが、それまでの九州という大雑把な把握から、広大な九州の個々に特徴ある地域へ目を開かせて頂いた貴重

な経験をする事となった。

### 立冬の薄き夕日を着て帰る

加藤 房子

〔俳句界〕4月号・自選30句より

中七から座五の「夕日を着て帰る」に作者の心象が投影している。立冬の夕日は一カ月半後の冬至のそれに比べれば、まだまだその存在感の認められるものである。作者はその夕日を「薄き」と捉えたのだ。三六五分の一日の季感を充分に表現している。通常「薄き」のような度合いを表す形容詞は曖昧さを残すものであるのだが、掲句の場合は「立冬」がよく支えていて不足が無い。ネガティブなのか、ポジティブなのか断定をしないところに奥行きや深さがある。他に「捨て白にありし月夜の粉碾唄」がある。

### やはらかき音は雨らし雛の夜

新谷 雄彦

〔俳句界〕4月号・青き踏むより

春の夜の雨が聴覚で認識されている。その雨音が「やわらか」と言っているのである。中七で軽く切れを作り出しているの、座五の季語「雛の夜」の直接的な説明ではない。日本人は季節の音を聞き分けながら毎日の生活を生きて来たということ改めて実感させてくれた句である。

## 虚子庵に満ちてゆくもの秋の声

須藤 常央

〔俳句〕 4月・鎌倉より

座五の季語「秋の声」が揺るがない。ホイジンガの名著に『中世の秋』があるのだが、その「秋」は凋落の秋ではなくて、収穫の多い秋をイメージしている。将にその「秋」に相当していると思う。筆者は昭和五十年代に俳句を始めたのだが、その時は『ホトトギス』に所属されている方々の中で道付けをして頂いた。もちろんその皆様と鎌倉吟行も一緒にする機会が有った。中七の「満ちてゆくもの」の実感筆者自身も体感されていることであろうと想像できる。他に「虚子住みしままる垣を繕はず」がある。

## 眠れない子と月へ吹くしゃぼん玉

神野 紗希

〔俳句〕 4月号・月へ吹くより

メルヘンというよりもサンクチュアリを感じる。四歳の子にとつて、そのサンクチュアリがいかに掛け替えのないものであったかは後に分かるものなのであるが、それは親にとつても同様なのである。「……ない」という否定の措辞は反対方向の現象だけを指しているのではない。夜のしゃぼん玉なんて随分と粋なものである。月光でも虹色に染まるのであるか？他に「風尖る鼻は絶望しない」がある。

## 庭下駄の鼻緒ふた色枯木宿

村手 圭子

〔俳壇〕 4月号・庭下駄より

「ふた色」はどう解釈したらよいのであろう。二色縹り合わせられた鼻緒を据えられた下駄なのであろうか？それとも二足の下駄があつて。各々赤と黒の鼻緒を据えられて沓脱に並んで下駄であろうか？筆者は後者のように読んだ。それはともかく、座五の「枯木宿」に対して、その二色の鮮やかさが際立っている。目に見える様である。

## 薺摘む日溜りの土付きしまま

蕨 七重

〔俳壇〕 4月号・夢の国より

中七の「日溜りの」が効いている。上五の季語「薺摘む」は新年の季語であつて、「日溜りの」が新年を言祝ぐ感性を導引しているし、温かみを演出している。「……まま」によつてその温かみを持ち帰る喜びにも通じているように読める。平穏安泰な日々の暮しを願う気持ちで満たされている。他に「札納め火焰の達磨転がり出」がある。

## 空も日も海もこわして猫の恋

山下 久代

〔俳誌〕「形象」3・4月号

雄大な景の中に座五の季語「猫の恋」が幅を利かせている。凄みさえ感じるほどである。係助詞「も」による並列の技法を用いて「空」「日（太陽と想像する）」「海」という大自然のアイテムを「猫の恋」が向うに廻して太刀打ちし、一歩も引かないでいるからだ。「も」の濫用は俳句では戒める場合が多い。「も」で導き出した事物の輪郭がぼやけてしまうからだ。しかしながら、この句は作者の故意の仕様と考えられ、効果も抜群である。

# 自選二十句

正木 萬蝶

払 暁 の 尼 門 跡 の 淑 気 かな  
陀 羅 尼 助 般 若 心 経 目 借 時  
啓 蟄 の メ レ ン ゲ ゆ る き 角 を 立 て  
初 燕 低 し 防 衛 大 学 校  
う ら ら か や 鳥 辺 野 化 野 蓮 台 野  
長 生 き の 途 中 朝 餉 の も づ く 汁  
柿 若 葉 生 命 線 よ り 運 命 線  
紫 陽 花 や 群 れ て 華 や ぐ 未 亡 人  
風 死 す や 右 に 左 に ラ ブ ホ テ ル



底紅や方違へして再嫁せり  
朝顔の咲くとき開く裏の木戸  
父より母の進化の早し疣むしり  
生盆や書棚に並ぶ発禁本  
酒林冷まじ三輪の社かな  
うそ寒しつくづく結婚線の二本  
飾られて連れられて行く七五三  
大根の白を危めし夜の厨  
歌姫の母も歌姫実千両  
病床は辰巳に向きて室の花  
晩節の禍福マントに包み込む

## 夏の蝶

永野 史代

「えっ、萬蝶?!」一枚の紙に書かれた俳号を見て、正直驚いた。その文字は強いインパクトを与え、目に焼きついた。

正木喜美恵さんが「萬蝶」になる。名付け親は長谷川知水氏（作家三田完氏）かな女先生のお孫さん。

喜美恵さんが初めて横浜水明に見えたのは何年前であったろう。近所の犬仲間の故・杉田みつる氏に何度となく誘われての事であった。その頃の彼女は仕事で休みがちだったが、句会に現れると、そのフットワークの軽いこと、もたつく筆者を助けてよく動き回っていた。初蝶のお出ました。故・中山玲子師との出会いでもあった。

啓蟄のメレンゲゆるぎ角を立て

長生きの途中朝餉のもづく汁

歌姫の母も歌姫実千両

長谷川かな女先生が「玲子さんは詩人」と仰しゃった指導者の下、かなり真面目に句に取り組んで頭角を現してきた。いつの頃から、遠い草加から小倉倭子さんが加わった。句会の後は港の揺らぐ灯を眺めながらグラスを傾け夕食を共にした。

玲子師がご一緒のこともしばしば。

横浜水明への道すがら句の話をした。帰り道も然り。ある大きなお屋敷の薔薇があまりに見事で立ち止まる。又、ある時は川面に向いて咲く紅白の寒椿を見て一句。

相生の寒椿白ばかり散る

いかにも萬蝶さんらしい素敵な一句をものにして、ただ只感心するばかり。相生が心憎いほど効いている。

その後、若松、東京水明、第三例会、鶴川山百合、ミモザ、と沢山の句会に出席。先生、先輩、句友の方々との出会いは彼女の句作の刺激になったに違いない。

紫陽花や群れて華やぐ未亡人

星野光二前主宰の選であるが、この頃からすでに彼女独特の句作りの世界が始まっていた。

柿若葉生命線より運命線

風死すや右に左にラブホテル

朝顔の咲くとき開く裏の木戸

生盆や書棚に並ぶ発禁本

うそ寒しつくづく結婚線の二本

大寒のスーパームーン人魚死す

大胆に言つてのける一句目。運命線を選んだことにドキツとする。ラブホテルのじつとり感と息苦しい暑さ……風死すの季語の巧みさ、感覚の鋭さを感じる。人魚の意外性とポエム、ロマン。裏木戸の句、ひっそりと木戸を開け朝帰りの男？

女?の情感が溢れている。(鬼之介主宰の句評に筆者も賛同) 季語の扱い方に舌を巻く。運命線の句は彼女の深い苦しみ、悲しみ、その影から生まれた句ではないかと思う。ご夫君を早くに亡くされ、その後の日々……二人のご子息を立派に育て上げた母親の安堵感。柿若葉がきらきらと輝いている。鶴川の合同句集『山百合』が発刊された。ご尽力の網野月を氏、町野広子さん達との巡り合いである。

第二輯、三輯より

貝の口の後姿や夏至薄暑

啓蟄の例へば脱ぐを生計とす

名門に生れて毒婦や紫木蓮

またの世は連理の白梅紅梅に

この先にホスピスありぬ石露の花

二胡ひびく荒野梅にも四肢あるか

貝の口の句は、ご実家が呉服屋だったとか、お琴も嗜んだ古風な一面も。京都や奈良へ旅することもあり、時には海外も巡っているが、こちらはまだ句にあまり表れていない。旅も句の幅を広げる要因であろう。ミモザ句会では「今日の一押しはこれ」と、誰も選ばなかった句でも堂々と主張する。その威力にたじたじ。それだけご自分の句を大切にしている証である。句の中には鬼之介主宰と通じる感性が息づいている。それを良き理解者の主宰はあたたかなまなざしで見守ってくださっている。

加藤郁乎の青春時代の『微句抄』に

かげろふを二階にはこび女とす

腰紐の全長春の日にさらす  
ひと買はれゆく早春のさるすべり

等がある。彼女の好きな句の世界!

飯島晴子作の〈はんざきの傷くれなゐにひらく夜〉もそうであろう。自分の好きな句は?の問いに

密か事に倦むや踊にまぎれ込む

初燕低し防衛大学校

晩節の禍福マントに包み込む

密か事とは：踊り好きな彼女が紛れ込む様子。防衛大学校がいい。好きな色は全ての色にグレーがかかった色。うーんなるほどと頷いてしまった。

〈てふてふが一匹鞭靷海峡を渡つていった〉安西冬衛作の詩には色々な解釈があるが、魂だけは蝶になって海峡を渡つてほしいと言う詩だと思ふ。彼女は夏蝶のごとくその力強い翅を羽搏かせて、何処へでもひらひらと舞う勢いだ。揚羽蝶、ときに黒揚羽のように……。横浜の萬蝶は、しかし秋蝶や冬蝶、凍蝶のつらさ、さみしさを分かる優しさがあつた。それを奥底に秘めている。

富澤赤黄男作

のようになかなる苦難にも負けず生きる萬蝶であつてほしい。水明創刊九十周年の節目に水明賞を受賞された喜美恵こと萬蝶さん、おめでとう! おめでとう! 今や水明ばかりか、あちこちで活躍されますように。その天性の資質と努力を発条にして、新たな萬蝶の飛翔である。

〈ひかり野へ君なら蝶に乗れるだろう〉

折笠美秋作

# 自選二十句

近藤 徹平

凡百の賀状にこもる息遣ひ  
乗り手なき回転木馬寒戻る  
國引きの神代知らずや蜆汁  
キューポラの失せたる街を春霞  
菜の花の堤延々夕陽まで  
ノーサイド大の字に寝る春の芝  
せせらぎの風を味はふ鮎の宿  
海霧深し生れ故郷は今他国  
グラマンの記憶は消えず夏の空

雨蛙金網越しに滑走路  
遠雷や棟上げを待つ立烏帽子  
白百合やオルガン響く天主堂  
牛若の跳ねし欄干夕涼  
日盛やシャッター街の郷土展  
秋の夜や宇宙へ誘ふ交響詩  
秋灯下キーボードの千社札  
小春日や筒音しのび田原坂  
野良を行く葬列の銅鑼雪螢  
片時も止まらぬ地球神の留守  
冬構終へて手締めやダム現場

## 竣功を祝う

境 延昭

四つ這ひで条幅を書く冬座敷  
雨蛙金網越しに滑走路

徹平さんを「岩槻俳句の手ほどき」で知って早々平成二十七年の感服の二句である。この句に出会うことで氏の人となりを知った気分になり親近感を覚えた。

揮毫の依頼でもあったのである。功成り名を遂げた人の余裕を感じる冬座敷である。上五の具象性と省略の効いた中七に風格が備わった。一方、雨蛙の句には将来を夢見る少年の憧憬がある。体言のみの情景で大空を飛ぶ飛行機への憧れが読み取れる。感性と技量の確かさに舌を巻いた。岩槻では句会の余熱を駆って中華料理「永楽」での懇親の場を逃さない。紹興酒が絶品である。紹興酒にもまして、徹平さんの酒は好い。酒に有り勝ちの自慢話や陰口が無く、聞き上手である。俳句談義に及ぶとき徹平さんの目が光る。その場こそが俳句の手ほどきと思う節が見える。

「岩槻俳句の手ほどき」で知己を得て一年余の後、平成

二十八年四月から「水明第一例会」に参加、それを機に本名「徹」から「徹平」に号を変えた。第一例会は席題が伝統の句会ここで持ち前の瞬発力が備わった。徹平さんは席題の提示からいつも四十分後には投句を終えている。

梅雨晴や知覧の手記は雄々しくて  
海神に召されし学徒沖繩忌  
グラマンの記憶は消えず夏の空

何れも第一例会での席題詠。戦争の記憶を引きずる昭和一桁世代、小学低学年の頃に詠んだ「節分や軍国主義の鬼は外」の性根は健在である。

徹平さんは奈良県庁の土木技師であった父上の長男として奈良で出生。父上が満州国交通部（国土交通省に相当）への転出に伴い、現在の中国黒竜江省で幼少期を過ごされた。しかしご母堂のリユーマチ発病のため、終戦を待たずに埼玉県神保原村（現上里町）に母子三人で帰国。その地で福田藤十郎さんと出会い、小、中、高校を共にし親密な交友が今に続いている。往時を偲ばれる句を引く。

海霧深し生まれ故郷は今他国  
境内の三角ベース蝉しぐれ  
亡き母の倍生きてをり孟蘭盆会  
風邪の子のひたひに額当つる母

孟蘭盆会の句から察するに、ご母堂は徹平さんの大成を見ずの早世であったようである。ご母堂が和歌を嗜まれ、母方

の祖父は近在の句会の常連だったと聞く。詩心の筋は母系の様である。風邪の子の母恋いの思いが切ない。

進学から就職に当たっては父上と同じ道を進んだ。大学で土木工学を学び建設省（現在は国土交通省）に技官として入省、省の技術系業務全般を統括する最高ポストまで昇りつめたキャリアの持ち主である。

若い頃に携わったダムや河川の設計・建設、その現場を詠む句の臨場感に注目する。

### 新緑やダムの重機に女性技師

ダム竣工を祝ふ放流水の秋

雁を追ふ飛行機雲や人造湖

冬構終へて手締めやダム現場

退官後は外郭公団の総裁、そして土木学会の会長に就任されている。行政の要職にあり学究の人でもある。公務員は採用の時から事務官と技官に区分され、仕事の領域もそれぞれ線引きがあるようである。技官としてその専門分野を全うされた徹平さんの矜恃を見る。

### 蒲公英や振り向きもせぬ永田町

水明創刊八十五周年記念応募で準賞作品「生きてをり」三〇句の中の一旬である。政治の場に近く表舞台に立ちたがる事務系役人を暗示し揶揄を込めた永田町と読む。

俳句に熱心というか、取り組む姿勢には脱帽する。句会で

は女性陣に交じって清記の役を買って出る。水明入会の切っ掛けとなった「熊谷句会」では清記の時間が勿体無いと事前清記を引き受け、浮いた時間に俳句講座をお願いしたと聞く。現役時代から一貫した率先垂範が徹平さんの生きざまであったことが窺える。

本年一月、令和になって最初の新春俳句大会で徹平さんに披講のお役目をお願いした。披講はただ句を読み上げればよいというものではない。力強くよく通る声で、作者の意図や気分を推し量って表現しようとする姿勢が見えた。本来、詩歌は吟詠あつてのものとは知らされた。

### 凡百の賀状にこもる息遣ひ

キューポラの失せたる街を春霞

せせらぎの風を味はふ鮎の宿

日盛やシャッター街の郷土展

秋灯下キーボードルの千社札

徹平さんらしい魅力の五句である。俳句は経験したこと全てが肥やしになる。経験の幅と深みが浮き彫りにされる。句座を共にする中で、文字の詠み込みに進境著しいように見受けける。ただの一文を想を巡らせ景と季語を設定する。僅か十七文字の俳句、しかしその表現の領域は無限に近い。

季音作家として新たなステージで、その無限の可能性に果敢に挑戦されることを願って止まない。

折しも水明創刊九十周年のこの年、記念の大会での受賞おめでとございます。大勢の仲間ともども祝杯を重ねる晴れの席が待たれてなりません。

## 自選二十句

大塚 茂子

田楽の網に載せたきちぎれ雲  
麗かや和紙の里にもヴィヴァルデイ  
鎌倉に眠る女雛や立子の忌  
雨粒の光繋げて糸柳  
風光る仏師持つ鑿先青し  
紫陽花を縹に変ふる通り雨  
暮啼きて大門閉むる所化一人  
滴りをじつと見てゐる理系女子  
万緑が渋谷邸の庭に座す



日盛りにホースで洗ふ象の皺  
濡れ草に声も濡るるや虫の秋  
ペン先を登る記憶や秋の潮  
テープ切るゴールの先の鰯雲  
兄嫁の秘密の漏路ひち茸狩  
るざり機響く里村小六月  
漣の面に鴟の音跳ぬる舟下り  
聖夜かな胎児はなべてさかさまに  
はんなりと膝に乗りくる春着の子  
竹馬や望みの高さ少年期  
橋の名を問ふ人のあり春シヨール

## 未来における可能性

山中 順子

「県北に水明の句会が開かれたのが熊谷句会である。福田藤十郎さんの尽力で会員を集め、光二前主宰が指導に当り、活発な句会として発足させた。私も時々招かれたがその頃から雰囲気のない句会であった。その一員として小まめに動いている茂子さんが印象深く記憶に残った。

武甲嶺の乾きを癒す木の葉雨

雁帰ることりと停まるローカル線

人の手を拒みて美しき崖の百合

落葉踏み体ふはつと軽くなり

冬帽や知覧を語る人も老い

武骨ながらもローカル色のある句を以て新珠賞に挑戦し見事に賞の栄を勝ち取った。その全国大会の前夜祭に緋の着物を着た茂子さんの印象が鮮明に残っている。そして気に掛かる一人でもあった。まず茂子さんの俳句への切っ掛けを語らなければならぬ。この道へ導いてくれたのは加藤草太郎さんであり、ご親戚の間柄なので、健治さんと呼び、五十年振りに再会したという。二十三年に詩集を頂き俳句の事について

話を聞いたがその頃は遠い世界のように、余り乗り気がしなかった。その後五月頃に熊谷句会に誘われ、一月に熊谷句会に入会と同時に水明に入会し今に至っている。

茂子さんの家族は日本の普通の構成で子供達も立派に成長し、茂子さんは自分の時間を生け花、詩吟、カラオケと趣味に通っていた。しかし今は八十%を俳句が占めているという。それは嬉しい事であり草太郎さんは素敵な人を残してくれたと感謝したい。存命であればこの記は彼が書いていると思うと悔しさがこみ上げてくる。

さて水明賞に至るまでに振れてみよう。

母の墓似合ふ野菊を折りに行く

我が庭の柿が夕日をひとりじめ

野の花が似合う母であったのか、淋しいよりそのような母を愛した茂子さん。夕日をひとりじめしている柿の実を見て心の深さに何かを見つけたのかもしれない。俳句の初歩が出来る上ってきた。

なつかしき妣の館こや桜餅

初針や妣の一衣をお手玉に

その母の墓から成長した証として「妣」の字を使うようになった。俳句の興行が少しずつ身についてきたように思う。派手な印象はないが、静かに潜ませているような句の作り方を覚えてきたようだ。

鞆を降りて翼をなくしけり

保護色の蜥蜴のこぼす涙かな  
緒の固き白露の朝の宿の下駄

この辺になると今までの句とがらつと変わる。視野が広がって見つけたものは見逃さなくなつた。いわゆる取合せの妙のポイントを決めるのに迷いがなく季語の選択も確実になつた。だんだん自信がつき水明の行事には必ず参加し、それも熊谷の女性陣を連れて来てくれる。そして好成绩を残し帰りはお茶をして……。そこには草太郎さんも居たのですね。今は草太郎さんに代つてリーダーとして茂子さんが居てくれる。今度と一緒にお茶したいですね。

凜と立ち秋の陽羽織るかな女句碑

回廊に作務衣干さるる十二月

極月やビルの壁這ふ命綱

最後の白は家族総出の鏡餅

何の予備知識がなくても句の内容が伝わってくる。だからといってそのままではなくどこかに読み手に対しての工夫がある。平凡の中の非凡であろう。

荒東風や兜太の記帳歩の重し

兜太先生の地元である以上何をおいてもお別れには行かねばならない。しっかりと俳句の魂を頂いてこられた事でしょう。人間の別れはつらいものです。

私が熊谷句会の指導を預つたのは、光二前主宰と萬二郎さんからです。大宮11番線の快速で熊谷に着くと駅にずらつと

女性が迎えてくれる。そして駅の大戸屋さんで軽い昼食を頂き、句会場に行く。草太郎さん、藤十郎さんが元気で句会をリードしていた。病気になるれて、入院先から投句してくる草太郎さんの句には時には殺気さえ感じた。

兄嫁の秘密の漏路茸持

るざり機響く里村小六月

聖夜かな胎児はなべてさかさまに

一寸目をはなしたすきに実力をつけ茂子俳句は、意外性を身につけてきた。

孟蘭盆会寡黙な兄がうどん打つ

何でもない当り前の事を詩として作品化する術を会得してしまつた。真白く仕上がったうどんの艶が見えてくる。そして家族の繋がりを感ぜさせる。今は水明の要である編集の一員として鴻巣から発行所まで仕事に通つてきてくれる大切な人である。

安達太良の智恵子の空は花曇

日盛のホースで洗ふ象の皺

初明り天地返し土の影

この辺りで水明賞はもしかしたらと思つた。やはり頂いたね。最後に茂子さんの心意気は「私が必要として頂ける場所があつたらその場所で生きる」と頼もしい言葉。水明が明るくなつた。これからも良きリーダーとして頑張つて下さい。本当に水明賞おめでとう。そして両手を上げて万歳だ。

山本鬼之介 選



つぎはぎの気憶のパズル春の雪  
丸めたる紙の匂ひや光悦忌  
つづら折りタイヤの軋む涅槃の日  
啓蟄や置かれしままの万歩計  
玄海の荒ぶる波や受験の子

さいたま 青木 鶴城

芽柳や広重の絵と同じ風  
強東風や行つたままなるフリスビー  
芽柳を時折映す池の風  
卓上にパンジーの束人を持つ  
靡なる稜線後に発車ベル

川口 野田 静香

芽柳や銀座の母は今いづこ  
歎立ての準備万端春の土  
地中海の青を想ふか風信子  
春立てり夜来の豆を犬が食べ  
梅月夜コロナ対策迷走す

さいたま 日高 徹

けもの道誰が運びしや花すみれ  
那須おろし避けて寄り添ふ壺すみれ  
春北風や津軽三味線叩く撥  
北の空閉ぢて静もる鳥曇  
蒲公英の根も天ぶらにソロキャンプ

渋谷さいち

冴返る目力宿す般若面  
足下に小さな宇宙下萌ゆる  
賑やかな笑ひが尽きぬ雛の宴  
順風も逆風もあり花ひらく  
尺八の音色もれくる花の宵

熊谷 越田 栄子

シネマ出でヒロインのままかぎろへり  
疎ましや連理の枝も梅の夜も  
受験子は双子弟よく笑ふ  
受験子の腫れし臉を送り出す  
菅公を拝み倒せよ受験生

横浜 正木 萬蝶

皮衣<sup>かんじき</sup>プライド高きハイヒール  
標<sup>かんじき</sup>の踏みし道行く登校子  
春寒し車輪が軋む山手線  
無理しをるバンジージャンプ山笑ふ  
春の風邪吐息が青江三奈のやう

さいたま 保坂 翔太

見えずして憎きウイルス霞立つ  
校長も時折水をヒヤシンス  
蔵町に蛇の目がにあふ春の雨  
受付嬢のやはき言の葉風信子  
春の雨陸奥に九年と言ふ月日

さいたま 熊倉千重子

一輪車を漕ぎだす少女たんぽぽ野  
おいそれと踏みぬ捨畑つくしんぼ  
春の陽を射抜き飛行機雲が伸び  
水温む物陰の草語りくる  
草の土手風に浮かるる恋の蝶

曲淵 徹雄

つくしんぼ今年も確と線路みち  
土筆摘み見あぐる空に故里を  
寄する波テトラポットと磯あそび  
スカートをちよいとからげて磯あそび  
露天湯にさざれなみ立ち春の雷

草加 河野はるみ

静静と白磁にひらく桜漬  
お焚上げの達磨の背に落花舞ふ  
明色のうす紅を差し春シヨール  
囀に未だ目覚めぬ古墳かな  
明年を約して雛の面被ふ

高崎 原田 秀子

ヒヤシンス美貌の猫と出窓かな  
浚渫の川の深さよ春の鴨  
深山の稜線隠す棚霞  
大樹林映す湖面や夕霞  
夕陽背にのつばの影が花の道

さいたま 宮崎チアキ

菜の花や色立つ武蔵水路かな  
鎌倉に眠る女雛や立子の忌  
花冷に茶粥の甘し箱根宿  
人の手を借りず大樹に山桜  
高遠の山盛り上ぐる桜かな

鴻巣 大塚 茂子

ほのぼのと明けゆく空に花の雲  
土手に佇ち春満月の利根有情  
花は二分赤城の奥の木々の冷え  
花香燃えて夜空をたかぶらす  
折り合はず筆措く宵の花の冷え

熊谷 神田 治江

休田に出水の名残薄氷

行田 近藤 徹平

画用紙に手書きの名刺卒園児

種見ゆる俄か手品師花筵

首塚に射し込む春陽大手町

馬刺には蒜醬油球磨焼酎

良き事の子感ふつふつ初音かな

下萌や鴨居に届くにきびつ面

菜の花や繋ぐ匂ひのいとほしき

土手の色丸ごと包み草の餅

草の餅数へ数へて包む青

若狭 飛永 鼓

山巖にけぶりひとすぢ二月尽

崖に咲く堇ふるはず光かな

眺望の視線にまとふ木の芽風

山畑の窪みに宿るすみれ草

一条の木もれ陽溜めてすみれ咲く

さいたま 秋本カズ子

息凝らし吉報待つや春の雪

淡雪を掌にのせ走り寄る

越冬の青菜目覚むる春の朝

田も山も萌黄の色に鳥帰る

鳥帰り湖畔に残る餌の箱

秋山 紅花

老いてなほ守る田畑土筆生ふ

莫大小メリヤスを着たり脱いだり彼岸前

春雷や川舟通ふ蔵の町

愛娘なけれど覗く雛の市

地団駄を踏む子悪い子つくしんぼ

髪染めて眼鏡も替へて春の服

震災を知らぬ蒲公英根を張りて

フェルメール展には瑠璃色の春の服

お下がりがなれど姉より似合ふ春の服

寄り合うて小さき幸せすみれ草

新 暦文

りんりんと蒲公英の絮空かくる

鳥帰る去年の空路忘れざる

鳥帰る漣はなほ伊豆沼に

雪解水碓を連れて溪下る

牡丹雪越後平野を華と舞ふ

加藤でん治

アネモネをアモネノと言ふ男の子

お地藏の慈悲のまなざし梅開く

宗教の混在の国涅槃寺

彼岸寺手押し車に砂利の道

旧ガラケーに思ひ出写真春の夜

東京 太田 絹映

さいたま 染谷 正信

牡丹の芽一寸足留め一休み  
春風や催眠術を掛けないで  
跡取りの絶ゆる田畑や落椿  
町中の最後の田圃田仕舞す  
老犬も介護車に乗り花辛夷

さいたま 田中 章嘉

春風少なき髪も怒髪かな  
山笑ふ岩に腰掛け露天風呂  
君と来し風土記の里の蜆汁  
住まひ替へ迷ふ路地裏春の昼  
独り居を癒す花東春の宵

さいたま 斎藤 みよ

樹齡千六百年の芽吹きかな  
御神木の万枝に光る木の芽かな  
雲を打つ鯉の尾鰭や水温む  
応援の少女いつしか土筆摘み  
土筆和二合徳利に添へられて

上 尾 横山 君夫

三浪の風格隠し受験生  
お守りは祖母の手作り受験生  
陽炎の中にとけゆく背番号  
春の空ぐるりぐると逆上がり  
つんつんと頭突くはしだれ梅

東 京 石田 慶子

春の雷姉妹げんかの最中に  
種えらぶ短き指は母譲り  
青空やあつばれ梅の老いの肌  
花冷のいか焼く匂ひ露店かな  
春の風子の旅立ちを送る母

さいたま 西幅 公子

舞踏家のジャンプに春の光満つ  
散歩コースの気になる家の姫椿  
巣作りの鳥生真面目に枝運ぶ  
桜さくら小田原城に咲き競ふ  
春寒やまた別の歯が欠けてをり

平 塚 丸屋 詠子

鳥帰る石の重たき摩尼車  
春の雪届く葉書の達筆よ  
越中の紙風船を楽しむ日  
初蝶やブロンズ像の肩にふれ  
山笑ふ列車も汽笛たかめたり

橋本 京子

春の雨裾濡らしつつ神楽坂  
春雷にびくりびくりと犬の耳  
再会を花どきと決め電話切る  
生野菜さくさくと食む弥生かな  
乳ねだる牧の子馬に風やさし

さいたま 笹本 啓子

齒科台にヴィオロンを聴く余寒かな  
野荒らしを見てゐるやうに猫柳  
春泥をかき分け道に座る龜  
春の寺托鉢僧と暮らす犬  
少年の旅立ち近し草青む

伊予 向井 章子

柔らかな手にやはらかき草の餅  
草餅や店の奥より八代目  
ありがたや今春眠をほしいまま  
寢床よりあれこれ指図春の風邪  
老いの足下萌えにさへ躓けり

若狭 山崎 郁子

初出勤の日の赤飯と蜆汁

さいたま 梅澤 輝翠

明り窓から吾子を眠らす朧月  
ジャズ流す歩行者天国朧かな

さいたま 下川 光子

また逢ふ日約束すれば春の雷  
ふるさとの花の街道会釈して  
また出会ふ橋をくぐりし花筏

ありたけを捌きて軽し浅蜷壳  
浅蜷採る縄文人の気概かな  
襟たてて寅さん来るや雪解風

三味線のもれくる路地を春シヨール

塩野 久子

春寒や陳列棚は空のまま  
紅梅をほろほろ零す雀かな

本橋 幾子

すみれ草山の犬の走り根に  
夕東風や人を呼ぶかに揺れ柳  
ビル街を闊歩の春のニューモード  
緑まだ淡き遠嶺や鳥曇り

下萌や古墳の容まろやかに  
鳥帰る胎内羅針盤信じ  
風に乗り雲を乗り継ぎ鳥帰る

旅の途と見ゆる一群鳥帰る

山口 韶子

観梅や上枝の花に眼を細め  
下萌や代々繋ぐ水明忌

新井 孝磨

嶺はまだ白さ残すに鳥帰る  
春雷や越後平野の穀倉地  
肩越しの君の横顔卒業式  
玉響の春のみ雪の別れかな

二月尽一尺二寸の鯉捌く  
鎌倉の古き石段余寒なほ  
一の宮柄杓の水も余寒かな



麗かや病室からの筑波山  
待ちに待ちたる退院の日や春さざす  
麦青み足に地球を実感す  
白梅のすきまを埋むる青き空  
風光り吾の生き甲斐庭仕事

杉戸 佐々木史女

ワイン飲むグラスに青葉映りけり  
遠雷の余音にペンの手を止むる  
走り根に足掬はるる青葉雨  
朝曇葉先に残る雨の粒  
牙返る甕の焼酎量り売り

さいたま 田中 泰子

をのこしか居らぬ姉貴へ内裏雛  
旅疲れ一氣に消ゆる雛の宿  
曲がりたる平緒氣になる男雛かな  
雛の屏風の代りに虎絵屏風かな  
パンジーの花壇に高き垣根かな

さいたま 山戸 美子

水温む少し移ろふ富士の影  
邪氣払ふ氣迫が欲しい木の芽時  
秘湯巡り穴場は撫の芽吹く里  
始末良き母を見習ひつくし食む  
就活も祖父に願うて入彼岸

春日部 諏訪サヨ子

春の雨口紅の色替へてみる  
花薺三味の音洩るる昼下り  
春雨や野川ひそひそ話して  
沓脱ぎ石の陰にひっそり花薺  
桜餅乙女心のもどりけり

高橋 敏子

高価菓子日付過ぎたる春の午後  
ウイルスを磯巾着に食はせたや  
しやぼん玉父子の絆のせて飛ぶ  
蘇る震災の日や春の虹  
泥に住み鯉たくましき春の川

和歌山 南條さわゑ

寒戻り五日遅れの日記書く  
なんとなく草餅買ひて帰りけり  
一片の雲なき里に梅香り  
木蓮の芽吹きに負けぬ日ざしかな  
年の豆もくもくもくと八十個

水野 興二

強風ものかは啓蟄の街へ出づ  
啓蟄や忘れてゐたる失せ物が  
山笑ひ地藏も笑ひ吾もまた  
ロープウェイの長蛇の列や山笑ふ  
年高のいとこ来てゐる春休み

東京 石川 理恵

木の芽どきものみな動き初む気配

春日部 仲田 利子

陽と遊ぶ見沼の川藻水温む

たんぽぽ響き優しく咲きをりぬ  
梅香り天平美人なる心地

吉川 杉浦 理恵

水温み青き流れの梓川

磯遊びぼらの稚魚群れ潮溜り

土筆かと喜ぶ夫や袴取る

土筆野や遊ぶ子供の幾世にも

大仏在す上野の森や入彼岸

活断層蛇早早に穴を出づ

負けん気の子馬父似の鼻柱

さいたま 森 和子

笹鳴きのしきりや朝刊未だなり

横浜 川島 典虎

ひとしきり跳ねて子馬は乳ねだる

雛飾る御祖みおやの描きし絵も軸も

風吹けば牧の子馬の耳聡し

叱られる前に子の出す土筆んば

嶺つづく景色を愛づる弥生かな

手招きで子を呼ぶ浜や風光る

蒼き湖見ゆる弥生のテラス席

恋の猫たたかひすみて鉢の水

谷水の音トレモロに山笑ふ

川村 治

相輪の奈良の空より春の雷  
ハンマーヘッドクレイン林立春の雷

さいたま 竹澤 和子

一心に箸を使ふ子蛭汁

宿酔や朝餉の蛭六腑まで

光りつつ散る噴水の穂の乱れ

旨味増し冷凍しじみ粒揃ひ

水無月の大樹にかかる昼の月

朝出合ふいつもの人や春シヨール

鄙びたる茶店に似合ふ草団子

鞆や空を蹴り上げ無重力

反町 修

迷ひ猫探しの散らし長閑なり

いすみ 平石 睦子

たんぽぽやゲートボールの球の音

春の夜のクロスワードで知る類語

集まりてたんぽぽ潤す雪解水

春の野や棒遊びめく測量士

揺れてゐる水面の樹々や春の鴨

ひつそりと繰り戸の奥の小鳥の巢

水温み生き物の影動き初む

福島の固きゲートに春の雨  
迷ひつつ窓を細目に春の雨  
もう少し歩きたくなる木の芽道  
木の芽風氣勢をあぐる斜面林  
時にまだ風の冷たき木の芽道

さいたま 松田 朋子

手作りのマスクも入れて宅配便  
春耕や馴れぬ男の及び腰  
流れ行く雛と目が合ひ笑み返す  
指先が緑に香る蓬摘み  
リハビリや笑顔の戻る春帽子

和歌山 嶋田 洋子

青き踏む靴紐きゆつと締め直し  
花を愛で歩をゆるやかに散歩道  
孫の手を借りて菜園耕せり  
今日はここまで区切りをつけて耕せり  
菜園を耕す俄か農夫かな

蕨 細井 良子

愛しさを知るや知らずや花薺  
花薺田の涯知れぬ穀倉地  
春雨や息弾ませて走り行く  
珍客の仕草滑らか春の雨  
ぺんぺん草口三味線もほどほどに

さいたま 福田 育子

すれ違ふ車の跳ねし春の泥  
彼の子規も見し大川の花の雨  
空襲の記憶は遠し花散りぬ  
芽柳のすらりと伸びて水面まで  
芽柳や柔らかき風呼び寄せて

東京 鈴木 和子

春場所や行司の声のよく響く  
球児等の無念の涙春の星  
休校よりつづく自粛や春休み  
朗報に慌てる父兄卒業式  
春疾風日に日に増ゆる陽性者

和歌山 高橋満耶子

淀川に棹さす舟や春の雪  
春の雪水無き川に水となり  
北国の空を焦がして鳥帰る  
引鳥の暫し留まるウトナイ湖  
野麦峠を越えて広がる春景色

さいたま 千坂 平通

卒業で知るさよならの甘い蜜  
卒業式早く母親撒いて来い  
汐干けば月夜を歩く鱈五郎  
むつごろう元手に買ひしオートバイ  
有明海を己がすべてと鱈五郎

町田 瀬戸雄二郎

春雷に立飲み一杯帰宅せり

さいたま 小川 洋子

春寒や議事堂裏の下り坂  
下萌に心昂ぶる歩みかな

栃木 佐々木典子

いつときの右往左往の春雷よ

鯉が身をのり出す音や水温む

落語会呵呵大笑の春の昼

水温む岸にバケツと網もつ子

冷凍の蜺なれども和洋中

東京 水落 守伊

大樺芽ぶかんとして風を呼ぶ

さいたま 野村 美子

宿酔や蜺の汁を酒のしめ

宍道湖や竿で操る蜺舟

ヤッホーと返る研よ山笑ふ

角のごと鉄塔並べ山笑ふ

蜺漁のエンジン響く十三湖

子宝杉跨ぐ爺婆山笑ふ

春の山背には白き富士の山

春雷やハウス栽培順調に

お茶会の中止の知らせ春の朝

国境のトンネルを抜け春の山

若狭 岡本 祥子

出合ひから五十余年よ長閑な日

和らぎのふるさと便り蒸鱧

ささくれの心宥めし黄蒲公英

露の臺育つやながく家を空け

県境の隔てを無くす花辛夷

昏迷の世を見抜きしか春の虹

枝跳んで栗鼠三つ巴木の芽山

横浜 山岸 弘子

イベントの延期メールや菜種梅雨

空つぼの鞆うれしく卒業す

歩をやすめ梢見上ぐる巢立ち鳥

花の空鶴の飛翔をベッドより

街道につづく空家や雛の家

住職の白き眉毛や捨頭巾

目借どき何するもみな人だのみ

教へてよ溪の序曲を山辛夷

西方へ猫欠伸する彼岸かな

やほらかき土につまづく春の闇

気まぐれな海よ漁翁の蒸鱧

遠くなる親孝行や花こぶし

子育てを見守る地藏燕の巢

小浜 松島 寛久

遠くなる親孝行や花こぶし

子育てを見守る地藏燕の巢

淵の色いよ濃さ増し山笑ふ  
夕映えを崩して雨後の山笑ふ  
ふうふうとさましさまして蜆汁  
鉄鍋は沸湯寸前蜆汁

さいたま 白田 みち

夫と飲むお茶の時間や桜餅  
天辺に鳥啄むや柳の芽  
芽柳のやさしき風に吹かれをり  
桜咲く遠くに富士の姿かな

さいたま 高原 和子

弥生対局白くしなやか棋士の指  
指揮棒のうねり軽やか花の宵  
光明寺の山門登る花の冷え  
春の宵ほろ酔ひて夫太つ腹  
黄水仙人の命の脆さかな

宮代 関谷多美子

騙す友有りて楽しき四月馬鹿  
昨年乙な仕返し万愚節  
二人静吉野の山に揃ひ咲く  
春の風何気無く拭くガラス窓

さいたま 綿貫ひさの

うす紙を剥がせば雛若きまま

東京 河原 叔子

絵付師の運ぶ筆先春立ちぬ  
春の旅伊万里の猪口に地酒酌む  
狛犬の染付けの口冴返る  
啓蟄や納屋の農機具磨き上ぐ

岡田 宣子

幾許の残りし刻よ雛飾る  
啓蟄やちまた騒がす地球ごと  
亀鳴くや闇にただよふ新コロナ  
呼気ふつと春雲ふんはり曳きゆけり

所沢 関根 千恵

女手で仕切る花市雪椿

越谷 阿部 幸代

雛祭姉妹のけんかひと休み

さいたま 佐藤 克之

神社の子見上ぐる雲と藪椿  
巢立つ子の声が遠のく花の冷え  
古民家のカフェある通り桜咲く

柿若葉愚直に生きて農の道  
朝酒に春の予感が浮かびくる  
明易し昨日の悔いをさらり捨て

春光の窓にひらりと猫の影

東京 山中いちい

春光の木立ちは碧くけぶりをり  
春光のシルクハットに投げ銭を

吟醸酒の表面張力春の色

リピングに射し込む光春の昼  
舟を待つ矢切の渡し麗けし  
永き日やスマホで遊ぶ昼下り  
花の雨ふたりにて歩くお堀端

さいたま 木村るみ子

白飯に落味喰広げ野山の香

柳父 はる

地虫出づころころ笑ふ女の子

竹林の細道ゆけば初音かな  
太陽の下で青々露の臺  
早朝の秩父連山春の雪

鬼石 加藤ナヲ子

山笑ひ盆栽村の如露の水

菜の花や右に左に風遊ぶ

清里の改札を出で春夕焼

飯室 夏江

新婚のトラック見送る桜まじ

啓蟄や馴染みし杖が母を待つ

踏切を春の驟雨に先越され

納棺師の整へし顔二月尽  
黙々と鉄打つ背にある余寒  
切株より出でし花片ふたつみつ  
ラストラン終へし列車のかざろへり

川崎 鈴木 玲子

ものの芽の力が土をもたげけり

鬼石 榊原 聰子

水鳥の仲間よぶ声春の風

縁側でランチと洒落て春の風

菜の花に取り囲まれて石地蔵

雪解が丸く始まる木の根本  
雪解やぐんと伸びする神の杉  
雪解の稲荷の石段一歩づつ  
紙敷いて滑る子供ら春の土手

さいたま 湯浅 和

乾杯す開花宣言されし夜

草加 外村 紀子

小鮎群れ瀬波に光る飛鳥川

つややかな野蒜の玉や風の土手

踊るやうに舞ひ上がる二羽初蝶々

兄弟で五十日祭春の雨  
通信簿の批評鋭し春灯下  
姫辛夷社交ダンスの裾さばき  
金縷梅や錦糸卵のちらし寿司

和歌山 葛城千世子

鯉跳ぬる池の光や水温む

さいたま 安倍 弘夫

木芽吹き手帳片手の遊歩道

土筆野に疎開時重ぬ八十路かな

妻は供花我は桶もて彼岸かな

陽炎や揺るる人影異界より  
つるしびな一目一目に願ひ込め  
ささやかな感謝をこめて雛しまふ  
飾るのは今年で最後雛納め

東京 畑宮 栄子

ペランダに貨車の音聞く春の夜  
怖るるや見えざるものの迫る春

夏柑の香り纏うて母帰る

散る花を追ふ子別れをまだ知らず

横山 礼子

山葵田に春光満つる伊那谷よ  
道端の遊具の母子に春の風

春眠や目覚時計倒れをり

桜吹雪のごと外れ馬券舞ふ

さいたま 山下ユリ子

摘みたくも摘めぬ寺領の土筆かな  
独り居の鼻の冷たき春炬燵

枝先の一輪重き臥龍梅

老眼鏡かけて土筆の袴取る

藤沢 小島喜代子

青天へ諸手を掲げ白木蓮

桃の花耕人の背に薄明り

自家菜園の黄花一面莖立てり

芽柳の校庭風の吹くばかり

櫻井よし江

街道の手押しポンプや花の冷え

初桜若き指揮者のコンサート

そびえ立つ旧家の庭の白木蓮

花冷や突如休館公民館

さいたま 森下美智枝

弥生かな今朝の冷気に背を丸め

跳ね仔馬いななき親も首を振り

慈悲の目に包まれ育つ子馬かな

馬の子は母を見つけて一目散

長井喜代子

閨日もまとめ仕事の二月尽

目覚しはお天道さまよ春うらら

啓蟄や我が家の亀は動かざる

春の日や五浦をめぐる遊歩道

小駒さち子

かげろひて横断歩道ふにやふにやに  
春休み紙ひかうきの腕競ふ

春の水娘のやうな指先に

蒲公英は大地の目なり青き空

川崎 板子由美子

肩車にしがみつくと指風光る  
木の芽みな爪マニキュアでお洒落して  
真つ青な空に泡立つ白木蓮  
臘梅の匂ひ零れて道案内

さいたま 菅原 真理

穏やかな春陽阿弥陀の掌に  
バスが来て翻されし春シヨール  
母の忌の祈りに春の絵らふそく

篠崎 紀子

吟行の眼きらきら初桜

緒方みき子

八重咲きの椿ぼとりと落ちてなほ  
朧夜や「相変はらず」と里の母

建ち並ぶソーラーパネルの弥生かな

落合 和枝

春駒やいつか騎乗の「武豊」  
若駒のたて髪なびく澆刺と

春寒に有閑マダム瘦せ我慢

鈴木 藻好

潜り行く有刺鉄線猫の恋  
新社員口調は既に課長級

むつくりと雪解の道の地蔵尊

武田 重子

軒下で猫が見てゐる春の雨  
春の雨フードを被り歩く人

過去はもう口に出すまい流れ星  
今日と言ふ日は戻らぬやほととぎす  
夜学子や切磋琢磨の筆走る

小川 藤間 友二

桜しべ降るハンドルにぎり上り坂  
グラスの泡プチプチ跳ねて弥生来る  
街弥生いろどり豊か和菓子店

さいたま 田中 タイ

## お知らせ

本号(六月号)巻末の

水明集投句用紙について

今年、水明創刊九〇周年記念のため、

八月・九月が合併号となります。

従っていつもの六月締切分は

八月二十五日締切、十一月号掲載となります。

お間違えのない様よろしくお願い致します。



# 夏季競詠

(令和2年)

年一回、季音・水明集全員が対象の夏季競詠です。ふるって御出句ください。したがって毎月投句の水明集はお休みです。

兼題「郭公」

「閑古鳥」「かつこ鳥」など傍題可

「進」(詠込み)

句数 両題通じて五句

締切 七月二十五日

投句用紙 卷末に添付

# 作品評

## 山本 鬼之介

美術や音楽、或いは陶芸や演劇など、本阿弥光悦に有縁の専門的な学校であつてほしい。あらためて証書筒から取り出して広げた時、真新しい墨の香が漂つてきた、という句意か。筆者が若い頃、何度も訪れた鷹が峯の町並や光悦寺の閑かな佇まいが、懐かしく想い出されてくる。

丸めたる紙の匂ひや光悦忌 青木 鶴城

朧なる稜線後に発車ベル 野田 静香

陰曆二月三日が、江戸時代初期の大芸術家・本阿弥光悦の忌日である。光悦は、刀剣鑑定・研磨の家業の他、「寛永の三筆」の一人に位置づけられる書家として、更に、絵画・陶芸・漆芸・出版・茶の湯などの広範囲の芸道に携わり、マルチアーティストたる諸般芸術の指導者として活躍、後世までその名を遺している。徳川家康から洛北の「鷹が峯」の地を拝領し、この地に光悦村（芸術村）を築いて多くの仲間を呼び寄せ、創作活動の日々を過ごしたという。光悦の屋敷が後に日蓮宗の光悦寺となり、寺の竹垣が光悦垣として有名である。数々の偉業を為し、寛永十四年に八〇歳で没した。

前書きが長くなつたが、本句の「丸めたる紙」は如何なるものであるうか。いろいろと想像が湧いてくるが、忌日を陽曆に置き替えて考えれば、卒業証書というのが妥当な答であろう。本文は印刷されたものであろうが、卒業生の名前は、一人一人墨書されているはずである。一般の大学ではなく、

旅の一齣を詠んだものだと思う。夜の時間帯ではなく、彼方の山々の峰が視認できる夕暮れ時かと思うが、「朧なる」という語句が修されているので、更に複雑な景観が展開してくる。ローカルの単線だとすれば、行き交う列車を待つ数分間、車窓から山を眺めていることになる。「朧」に加えての「発車ベル」が、旅悠をこよなく醸し出している。

芽柳や銀座の母は今いづこ 日高 徹

本句に登場の人物は、銀座で古いを続けて四十年余の実績を持ち、その的中率の高さから人気占い師の一人に推され、多くの人から銀座の母と愛されてきた横田淑恵さんのことであろうか。当人とすれば、元々は銀座の中央通りの歩道に出店していて、客が行列をなしたと聞いている。テレビにも数回出演して芸能人の客も多く、その後は、銀座八丁目の雑居ビルの一室で営業していたようだが、今も健在であろうか。

という前置きからこの俳句を読むと、作者の気持がよく分かる。作者も過去に占つてもらったことがあるのだらう。

さて、銀座の柳に話題を移すが、明治二十年頃に銀座の並木が柳に替わつてから何度か変遷があつたものの、懐メロの「銀座の柳」の歌詞の通り、今なお柳が銀座の象徴として大衆に親しまれている。いよいよ美しい夏柳の季節を迎える。

那須おろし避けて寄り添ふ壺すみれ 渋谷きいち

那須に縁の深い作者ならではの写生の利いた一句である。筆者も会社の慰安旅行やサイクリングなどで幾度か那須に行つたことがあるが、「那須おろし」なるものに遭遇した経験は無い。よく耳にする赤城おろしから想像すると、結構激しい山風なのであらう。日当りの良い草地に自生する可憐な花であるから、この句の情景が手に取るように伝わってくる。

足下に小さな宇宙下萌ゆる 越田 栄子

この句を読んで、釈尊のことば「天上天下唯我独尊」がふと浮かんできた。「宇宙とは何か」と質問されても、返答に窮する浅学の身であるが、同じ宇宙でも、この句の宇宙には親しみが持てる気がする。作者が、下萌という季語を媒体として、早春に地中から顔を出した草、そして、その源になつている土を、小宇宙という言葉で実感しているからである。

筆者の経験上、宇宙という語を俳句で生かすのはなかなか難しいと思うが、「小さな」を冠したことで成功した。

疎ましや連理の枝も梅の夜も 正木 萬葉

広辞苑によれば、「連理」の意として、二つの解説が為されている。その一は、一本の木の幹や枝が、他の木の幹や枝に連なつて木理（木目）が通じていること。その二は、夫婦または男女の深い契りのたとえ、と記されている。右の俳句に示されている連理は、この二つの意味を複雑にしかも巧みに組み合わせたものだと思う。梅の古木がある夜の苑に居る男女に、いま退つ引きならぬ問題が起きている。熱愛も冷め、相手の顔を見るのも、言葉を交わすことも疎ましいのだ。そして、梅の香や幽玄な花の姿にも同様の思いを抱いている。

皮衣プライド高きハイヒール 保坂 翔太

皮のコートを羽織り、踵が一〇センチを越すようなハイヒールを履いた女。「プライド高き」と言えば聞えはいいが、見るからに驕慢な女で、「君子は危うきに近寄らず」である。この種の女性を何処かで見掛けたのか。季語の皮衣からこのような句を編み出した作者は、なかなかの粹人である。

一輪車を漕ぎだす少女たんぼぼ野 曲淵 徹雄

学生時代から、自転車競技やサイクリングで二輪車に乗り慣れた筆者も、一輪車の経験は皆無である。姿勢を正して両腕で巧みにバランスを取り、住宅街の路地や公園、河川敷や川の土手道などをすいすい走る一輪車の子供を見てみると、自分も乗ってみたいくなる。一輪車は、竹馬と同じように、漕ぎ出しが大事らしい。たんぼの咲き乱れる野原での一輪車は、たとえ転倒しても大した怪我も無いだろうし、気分爽快であろう。臨場感いっぱいの俳句である。

明年を約して雛の面被ふ 原田 秀子

今もなおその時季に毎年雛人形を飾って、昔の想い出を大切にされているのであろう。お雛様と、互いの息災を喜び合い、無言の言葉を交わすのであろう。雛の節句が終わり、雛納めの日は、ことのほか淋しさが募るのではなからうか。その時の雰囲気がしつとりと伝わってくる。

高遠の山盛り上ぐる桜かな 大塚 茂子

江戸時代七代将軍家継の時、大奥年寄の江島と役者の生島を対象とした江島生島事件で、罪を科せられた江島が流刑になった高遠（現・長野県伊那市）の桜を詠んだ俳句で、城址公園の桜は、日本三大桜の名所として馬刺とともに有名である。城址公園の遠景の山々に咲く山桜も然り、公園に咲き誇

る桜もが山を盛り上げているように見えるのであろう。恒例の城址公園の花見は、他所と同様にコロナ問題で中止になった。

蔵町に蛇の目がにあふ春の雨 熊倉千重子

蔵町と聞くと、白壁の土蔵が並んでいる町を思い描くが、関東では、栃木市の巴波川うずまがわぞいに見られる蔵の景色や川越市の旧い町並がびったりである。特に前者の場合、川面に映る灯りに蛇の目傘を重ねると、まるで芝居の世界そのものである。新国劇「月形半平太」の中の名台詞『月さま 雨が 春雨じゃ 濡れてゆこう』を演じてみたくなる景色である。

つくしんぼ今年も確と線路みち 河野はるみ

何故か線路際に土筆や露がよく生える。むかし若狭に疎開していた頃、村の友達と遊びの途中で線路に耳を当て、刻々と近づく汽車の音を聴いたことがあったが、近くに土筆が生えていた記憶がある。この句を読んで、懐かしくまた新鮮な気持になった。

ヒヤシンス美貌の猫と出窓かな 宮崎チアキ

なかなか絵になる光景である。出窓のペルシャ猫とその脇にある鉢植えのヒヤシンスという構図を描いてみたが、それ

だけではちよつと物足りない。後ろに、物憂げな女性を配すると深みが出ると思う。月々金で「オスマン帝国」のテレビドラマを視ているが、その宮殿の雰囲気にとびつたりである。

土手に佇ち春満月の利根有情 神田 治江

皓皓たる満月の下、利根川の土手に佇む女いち人。男なら田端義夫の演歌「大利根月夜」の平手造酒<sup>みき</sup>ということになるが、女となると解釈がなかなか難しくなる。もしその場に出くわしたらどうするだろう。「利根有情」が絶品である。

馬刺には蒜醬油球磨焼酎 近藤 徹平

筆者泣かせの俳句に一読して降参。美味しい馬刺を食わず土地はいろいろあるが、酒とセットでとなると限られてくる。米を主原料にした球磨焼酎は、麦や芋で造る焼酎とは別の旨味があり、馬刺との相性が良い。銀座にある熊本県のアテナショップ「熊本館」で、多種の銘柄の球磨焼酎が販売されている。運が良ければ、「熊もん」に会えるかも。

良き事の予感ふつつ初音かな 飛永 鼓

立春を過ぎた頃から、春に近づく実感が、少しずつ濃くなってゆくが、鶯の初音もその一つで、視覚や触覚で感じるよりも迫力があると思う。もうそろそろかなと思っていた日に、まだまだ本調子でない初音を聴くと、ほっとするのであろう。

良きこととは何だろう。この時期から察すれば、お孫さんの受験合格発表が最有力であろうが、他にもあるかと思う。

崖に咲く菫ふるはす光かな 秋本カズ子

こんな処にと思う場所に、野草が遅しく花を咲かせている。崖の窪みに咲いている可憐な菫に、胸が熱くなる。その菫にとつて、春の陽射しが実に頼もしい。菫を震わせているのは風であるが、それを光にしたことで奥行のある俳句になった。

鳥帰り湖畔に残る餌の箱 秋山 紅花

新潟県瓢湖の白鳥のように、管理者が居て手厚く保護されている渡り鳥の生息地のことであろう。シーズン中は、観光客や近在の人達で賑わっていた湖畔も、鳥の群れが北方の大陸へ帰って行った後はひっそりとしている。湖畔に残された餌箱が、物淋しさをつのらせている。

一の宮柄杓の水も余寒かな 新井 孝磨

武蔵一宮氷川神社の御手洗の柄杓。作者の住まいからも近く、初詣に続く立春後の参拝の様子がよく詠まれている。

風光り吾の生き甲斐庭仕事 佐々木史女

季語から感じる爽やかな季節感と、高齢と思われる作者の規則正しい日常生活の様子が手に取るように伝わってくる。

# 水琴窟

(水明集四月号鑑賞)

池田 雅夫

欄干の風に真向ふ都鳥 森 和子

「都鳥」は「ゆりかもめ」とも呼ばれる。伊勢物語で詠じられたことで、隅田川とともに知られている。波の間に漂ったり空中を舞ったりする。杭や欄干などに止まり羽を休める。風と正対し寒さを凌いでいる。この橋は言問橋か業平橋か。

裏返る犬の遠吠え寒月光 大槻 瑤蘭

寒々と広がる夜空へ向けて犬が吠えている。最近はまだ聞きななくなつたが、郊外や静かな村里などでは聞くことがあるだろう。「裏返る」ほど声を張って吠えているのは、月に向けてかも知れない。「狼男」を連想し、幽玄の世界へ。

山裾にほつほつ消ゆる冬灯 飯田 忠男

冬の夕暮れは早く、山裾に点在する家々にほつほつと灯りが点る。夜も更けるころ、その灯りも一つ二つと消えて、村は静かに眠りに就くのだ。「ほつほつ消ゆる」で、冬の灯の寒そうな感が強まる。「ほつほつ点る」としても趣きがある。

七種の粥飽食の喉を焼く 瀬戸雄二郎

近年の正月は、肉料理などがずらりと並ぶ時代になった。従来のおせちにしても、食べすぎ飲みすぎで弱った胃腸を労ってくれるのが七種粥というわけだ。諷刺が利いている。

年玉の袋大事に離さぬ児 諏訪サヨ子

お年玉でも、昔と今ではその額に雲泥の差がある。児の無邪気なしぐさから、ちょっと昔の姿が見える。小生の幼いころはお年玉をいただいても、その使い道がなく、文房具の足しとなった。さてさて、おもちゃなどを買ったのであろう。

夕暮の木立ほんのり寒の月 関谷多美子

「ほんのり」が、「木立」を受け、あるいは「寒の月」にもかかり、意味合いを深めている。満月をイメージするが、これが三日月であれば西空の暮れ残った景が浮かんでくる。稲畑汀子の句に「寒月をとらへし梢の高からず」がある。

良く喋る女礼者の国訛 水落 守伊

「女礼者」は、正月の客を迎えるなどして、忙しい女性が三が日を過ぎてから回礼する習わしである。三が日の忙しさから開放され、口も滑らかになりお国言葉が出てしまうのも頷ける。高浜虚子の「よく笑ふ女礼者や草の庵」に並ぶ。

神鏡のしろがね光り淑氣満つ

櫻井よし江

「神鏡」は三種の神器の一つ、八咫鏡のこと。古代、まつりごとに尊ばれた鏡は日の光の反射光に影が浮かびあがるという。御神体として祀られることもある。「しろがね」の措辞が「神鏡」と呼応して淑氣をより強調している。

陽だまりをさがして一步寒の入り

小山 敦子

一年で最も寒さの厳しいのが寒の時期である。寒さのために体が固く縮こまり、外出するのさえためらいがちになる。外へ出たら北風に吹かれ、ますます背が丸くなる。少しでも温みを求め陽だまりへ体を寄せているのだ。心情に共感。

冬晴や長き白壁 武家屋敷

飯室 夏江

かつての大名の屋敷跡は庭園などとなり親しまれている。屋敷をぐるりと囲む築地塀の白壁が当時の面影を留めている。厳格な武家屋敷の佇まいと冬晴れの澄み切った空の青さが対照的に映しだされている。漢字表記の多さにも注目する。

お手付きも目で許しあひ歌留多取り

嶋田 洋子

家族団らんの一こま。老人と幼が一緒になって歌留多取りをしている。「目で許しあひ」の措辞に大人のやさしさが染み込んでいる。こうした正月風景をなつかしく思われる。

湧水にかすかな濁り寒の鯉

畑宮 栄子

淡水魚類の多くは、水中のより深い所に固まって越冬する。身動きもせず眠るかのように堪え忍ぶのである。湧水の温度は一年中ほとんど変化せず、凍ることもない。静かな湧水池の底のかすかな濁りに気づき、鯉の生命力に感心している。

初富士や丸き地球の海の上

小駒さち子

地球を丸いと感じるのは、広い水平線に対したときなどに限られ、山や建物で遮られる場所では実感できない。外洋の船舶の上から初富士を拝したのであろう。初富士とおおどかな地球に深い慈しみを抱いているのである。

剪定の捗るリズム 寒日和

緒方みき子

芽吹く前の庭木や生垣の手入れであろう。小刻みに鋏を動かす軽やかな音を発している。調子のよい音に作業も捗るといふのだ。寒中でも思わぬ暖かい日があり、それを有効に使っている。春には逞しく芽を吹いてくれることだろう。

風折れの枝の再生 今朝の春

遠藤 人美

昨年の大型台風など、強風に見まれて被害を受けることがある。風で折れてしまった枝に小さな芽らしきものを発見し、生命力の強さに驚いている。そして年輪を重ねてゆく。

鼓  
笛  
集

山中  
順子  
選

春服を旅立ちの子に贈る母  
行く末は極楽浄土飛花落花  
西行か大の字に寝る花筵

桜舞ふ真向ひにある裁判所  
さよならと云うた眼下の桜草  
またねつていつの日のこと春の宵

来年も桜は咲くと言ふけれど  
「煙草屋」てふ絵に佇める花の昼  
落涙のごとき落花よ掃かずをく

蒼穹下胎児の鼓動風薫る  
葉ざくらに句碑の艶めく旧街道  
青嵐古い木若木の松並木

祝福の大聖堂に百合香る  
花嫁のパールふはりと春の風  
手を取りて歩む階風光る

近藤 徹平

梅澤 輝翠

石川 理恵

河野はるみ

越田 栄子

仰ぎ見てまた振り返る八重桜  
古民家の下屋げやの荷車八重桜  
富士の嶺を彼方に置きて八重桜

湯上がりに匂ふ湯の花星おぼろ  
たけのこを今日は焼こうか揚げようか  
水垢離のごと桜薬降る中に

スキップの少女つまづく竹の秋  
二代目の屋台見守る遠柳  
出勤のママの襟足糸柳

うそ言へず誠も言はず春の雲  
散り急ぐ桜栄枯を覗かせし  
春愁の猫裏返るむつまじさ

付添ひは一人ときまり入学式  
新学期なれど一時間で帰宅  
四月馬鹿昼まで寝てる中学生

生涯の卒寿待近に万愚節  
憂きし世にいと愛でやぐ桜かな  
さくら桜コロナは無感はかな散る

加藤でん治

熊倉千重子

石田 慶子

神田 治江

葛城千世子

河原 叔子



新緑を一人占めして朝の行

コロナとの戦ふ朝の芽吹きかな

ツツジの紅メールの中より届きたり

小杉 自子

青芝や子等は臍出し馳け回る

筥の重さ忘るる子のはしやぎ

仙台より抱へ来し藤これ見よや

川島 典虎

鼓笛集巻頭（五月号）

私の好きな一句（自句自解）

新井 孝麿

日脚 伸ぶ 母の 形見の 鯨尺

母が他界して七年、席題でふと浮んだ句です。大正生れの母が私の子供の頃、着物を縫っていた時、竹の鯨尺を使っていた事が甦りました。

二本残した鯨尺は黒光りして、大正から令和まで、約百年の時と母の思い出。古希をすぎた私の好きな一句です。

鼓笛集作品評

山中 順子

春服を旅立ちの子に贈る母

行く末は極楽浄土 飛花落花

西行か大の字に寝る花筵

近藤 徹平

この三句は連作として詠めばそれ程深刻に思えないが、一句一句にすると胸を刺される。この三句は自身の事であろう。母を想い、その母は浄土の飛花を浴びて安らかに眠っていることであろう。そして願わくはではないが、花の下で大往生をしたい今の自分が生々しくここに存在している。この三句いろいろと空想しながら詠まされた。

さよならと云うた眼下の桜草

梅澤 輝翠

「云うた」は方言言葉かなと思ったがその下に眼下の位置がある以上音を伝えたのではなく過去のさよならではないか。深い句。

毎月25日発売  
定価1000円(税込)

# 月刊俳句界

2020年6月号

特集

## 旅があなたの 俳句を変える！

◎エッセイ

辻桃子 中川雅雪 大野鶴士

◎旅の思い出 森田純一郎

松苗秀隆 松岡隆子 中村姫路

鈴木節子 日下野仁美 上田日差し

◎旅吟のポイント

石井いさお 古賀雪江 小川晴子

小野寿子 伊藤伊那男 田島和生

特別作品30句

宮坂静生

ラビエ 俳句界NOW 藤本美和子

特集 オノマトペって難しい!?

藤野良孝 小野正弘 小野あらた

仙田洋子 鈴木牛後 池田澄子

前北かおる 黒澤麻生子 山尾玉藻 ほか

\*セレクトジョン結社「棧雲」清水山彦

私の一冊 小池康生「奎」

対談

佐高信の甘口でコンニチハ!  
辻元清美 (政治家)

別冊 投稿俳句界

一流選者14名!  
日本一充実の投稿欄

※一部変更の可能性がります。



株式会社 文學の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F  
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

特集

## 室内俳句の愉しみ

♪居ながらにして詠むもまた佳し

◎巻頭作品10句

井越芳子・小川軽舟・鳥井保和

永方裕子・中村正幸・ふけとしこ

星永文夫・正木ゆう子

# 俳壇

## 6月号

5月14日発売  
定価900円(税込)

巻頭エッセイ  
対中いずみ

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句「第II期」……山本一歩・田口紅子

わが俳句道・わが金言……長谷川 權

先人のことば……宇多喜代子

超結社の会へようこそ……「むじな」

続・日本の樹木十二選……広渡敬雄

俳壇史エピソード……坂口昌弘

季語への供物……井上弘美

俳壇時評……坪内稔典／俳壇月評……山田真砂年

俳句と随想12か月 野中亮介・武藤紀子

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話 03(3294)7068 振替00100-5-164430

## 句集喝采

近藤 徹平

### ◆竹内悦子「喜悦」

文学の森

著者略歴 平成八年二月二〇日大阪市生。平成三年八月岡井省二に師事。平成七年七月「槐」同人。平成九年句集「悦」刊。平成十一年七月槐賞受賞。平成十二年句集「竹」刊

句集の冒頭を師事した岡井省二「槐」初代主宰から工場と自宅新築の折に贈られた色紙「竹柏のうちに育む生業は喜悦めでたく信実昌盛」が飾る。表題「喜悦」は色紙に因んだ由。

神鶏の暁の一ト声悦の春

袋屋の軒は天国寒雀

鬼灯にやつと灯のつく米寿かな

一句は句集の帯に載せた句だが、悦は著者の俳号にも句集の表題にも入れた字で、著者の句全体の基調と推察する。二句は家業である袋屋の繁盛振りを窺わせる。三句は夫君が米寿を迎えた際の句で、次は白寿を目指そうとの句意が滲む。

陰陽師花札に鹿・紅葉かな

柿もみち葉は穴だらけでも綺麗

おみくじは大吉にして毒茸

墓交む天満宮の祝詞かな

分け入れば秋山に魔羅大明神

著者の悦は生半可ではない。一句の花札の相手は俳句仲間  
の女傑達なのか夫君なのか。二句は柿もみちの穴も含めて悦  
びと詠み切っている。三句の毒茸に大吉の託宣は悦びの想定  
内と窺える。四句は初孫の結婚式を祝う句だが、したたかな婆  
の悦びが見えてくる。五句の悦は読者に解釈をお任せしたい。

### ◆森 初江「柿若葉」

老岐坂書房

著者略歴 昭和十四年埼玉県さいたま市生。平成七年「野火」入会。同十四年「野火」同人。平成十七年及び同三十年埼玉市民文芸俳句部門優秀賞。平成二十三年日本文芸大賞。

池田啓三「野火」名誉主宰の序によれば、著者は三人姉妹の長女として家督を継ぎ教職の夫君と結婚し家庭を築いた。

桜咲きぬ潮引くことく子等菓立ち

生家継ぐ暮し悔いなし柿若葉

初御空仰ぎ大地をしかと踏む

野まはりの筈が本腰草を引く

式辞書く夫に桜の咲き初むる

夫が剥く柿の干場を探しけり

聞役の夫にすすむる温め酒

晩夏光教職一筋夫逝きぬ

一句は句集の冒頭句で夫君と育てた子息達が独立する光景。  
二句は句集の表題句で著者が継いだ屋敷の景。三句、四句は  
家業の農業を継いだ心意気。五句は夫君の校長就任日の景。  
六句、七句には常に家庭円満を心掛ける夫君の姿ありあり。  
八句、最愛の夫君は平成二十六年に七十五歳で大往生。

洞爺湖の島から島へ秋の虹

着ぶくれて出し入れ忙しパスポート

ありがたき健康寿命夏祭り

著者に俳句がある限り、健康を友に国内外を吟行して回る  
心意気が表れている。家督を継いだ長女の生き様である。



少年の開かずの窓や雲雀笛

微笑みを返す赤ちやん花あんず

雲雀野やトランペツトを吹く少女

気の合ひし風と遊べり揚雲雀

神さまの使ひや古墳に揚雲雀

雲雀野の道は空へと向ひけり

村ひとつ色にうづめて花杏

アルプスは遠くに光り花杏

草原に転がるタイヤ揚雲雀

揚雲雀声きさらさらと一行詩

信州は杏の花とコンサート

北国の門出の季節花あんず

花杏麓の村のワイナリー

揚雲雀声を残して火矢となる

たちまちに点と化したる揚雲雀

杏咲く信濃の夜は嬬やかに

信濃路の十万本の花あんず

揚雲雀棹歌先行く渡し舟

天空の舞に見得切る告天子

花杏また読み返す姉の文

第五例会(浦和)

梅澤 佐江  
河野はるみ 報

海日永楔の如く貨物船  
水尾  
永き日や白壁を塗る左官の手  
美佐尾

延昭  
光子

修

マスマ

光弥

喜恵

以上特選

曆文

玲子

恵子

順子

でん治

昇

延昭

光子

修

寛治

翔太

マスマ

光弥

喜恵

点滴の音なく刻む遅日かな

薄れゆく昭和囁みしめ草の餅

草餅に添へ水天宮の守り札

——以上特選

水尾

美佐尾

義子

はるみ

理恵

佐江

早苗報

関西例会(大阪)

森本

早苗報

轉の中の図書館窓光る

轉や森林浴の小半日

電線に憩ふさへづりひとしきり

轉も口細くせよコロナ風

大樟の揺れて膨れて轉れり

初蝶や広き舞台にくらくらす

コロナ禍やブランコ風にただ揺るる

たこ焼や雨に雀に風車

轉りの沸騰点の男坂

轉りの真つ只中をペアルック

轉りや昼まで眠る女学生

轉りや老犬散歩のんびりと

義子

〃

佐江

以上特選

水尾

美佐尾

義子

はるみ

理恵

佐江

若松句会(京橋)

菊池ひろこ  
石田慶子 報

吉原や常世までもと糸柳

見返り美人の科を真似たる糸柳

糸柳シフォンのドレスたをやかに

遠柳小雨にけふる戻り橋

白壁に人と柳の影絵かな

清元の粋な調べよ柳揺る

遠柳蘇州生まれと聞き及ぶ

誰を待つ柳の青む西銀座

洞庭湖太湖西湖よ遠柳

二本目の柳の下でデートかな

定め無き風に戯る糸柳

二代目の屋台見守る川柳

枝振りて穢れ祓はむ川柳

出勤のをんな小走り夜の柳

絹縫ひ針の穴は小さし糸柳

船頭のそつと払ひし柳かな

ポスト溢れ実家の庭の若柳

青柳となりてととのふ西銀座

日本橋にいい塩梅の柳かな

柳絮とぶ堀端かつて占領下

柳絮とぶ堀端かつて占領下

柳絮とぶ堀端かつて占領下

萬蝶

〃

佐江

鶴城

〃

倭子

〃

鶴城

倭子

〃

ひろこ

以上特選

儀勝

萬蝶

俊晴

はるみ

慶子

理恵

千春

知子

鶴城

月を

佐江

倭子

ひろこ

各地句会



雛の会 (浦和)

雨を除け葉裏にすがる蝶の群  
水遁の術も繰り出す蝌蚪の乱  
永き日のまだ揺れ残る母の椅子  
蒼天を挙りて目指す木の芽かな  
枝垂桜地に届きさう六地藏  
春愁や紅ひきをへて伏す鏡  
眠たくて睡る日永の留守居かな

俳句の手ほどき (岩槻)

藍染の指も藍いる桜餅  
花吹雪会津はいまも城を守る  
禪寺の全山包む花吹雪  
人つ子一人なき公園の落花かな  
花の塵地がむずむずとしてゐたる  
人恋し薄墨色の花吹雪  
行く末は極楽浄土飛花落花

燈女 佐江 喜恵 チアキ むら子 輝翠 かつ子  
順子 延昭 水尾 倭子 ます美 佐江 徹平

句碑囲む石に貌あり松の花  
流鏑馬の砂塵と落花入れ替はる  
夕映えの野点の袖に散る桜  
桜散り猿山の檻人の檻  
囲碁棋士のふるまひ楚楚と風光る  
散る花に別れ惜しみて夕散步  
茶一服春はあけぼの囲ひの間  
飛花落花水屋の先の囲ひの間

桜林句会 (大宮)

浅蜷掘る縄文人の貌をして  
朧夜の夢に庵主の佇ち姿  
廢坑の名残の鉄路草朧  
薙刀を物せし祖母や鐘朧  
神戸大池句会 (神戸)  
花冷やコロナの影のいつ消ゆる  
世情いま混沌として花の無垢  
晩春や衰へ知らぬコロナ風  
コロナ禍を氣象予報士桜まじ

義子 美佐尾 翔太 忠男 慶子 幸代 美子 かつ子  
光子 一恵 知子 美佐尾 早苗 礼子 千津子 玲子

近づきたる車夫の足音竹の秋  
竹の秋同じ色した家のあり  
かぐや姫の末裔気取り竹の秋  
踏みしめてなほ喜多院の竹の秋  
姪つ子は四人の子持ち竹の秋  
水明熊谷句会 (熊谷)  
初蝶を追ふ路地裏の三輪車  
蝶が舞ふ社の庭で聞く祝詞  
初蝶やローズマリーに羽休め  
味噌椀の貝の化身か小灰蝶  
蝶の昼赤子は手から眠くなり  
初蝶の一途に舞ひてかがやけり  
春疾風続く不況を吹き飛ばせ  
目の前をふはりと蝶の無重力  
兜太なき里の秩父に蝶生る  
ひかりごけ舐め「百穴」に蝶遊ぶ

新樹の会 (浦和)

窯元の破顔の朝や山桜  
八重桜抜け出てみれば天守閣  
山麓の湖畔のほとり八重桜  
永き日の少年空へボール蹴る  
八重桜百一歳と山の湯に  
永き日や夕餉の匂風呂の音  
外出自粛どつと咲いてる八重桜

玲子 由美子 萬蝶 史代 千春 徹平 正行 和子 秀子 燈女 裕江 栄子 藤十郎 茂子 鶴城 清吉 平通 京子 韶子 徹平 でん治

水明大阪俳句会 (守口)

大河の風に呼ばれて散るさくら

全て世はこともなさに花万葉

斜張橋の弦をつまびく桜東風

清流に生まれし風や青紅葉

沈む街桜並木をひとり行く

脇道を譲り合ふ日の花吹雪

蹲ひをおほひ山吹黄を尽す

コ罗纳禍や出番のなくて花筵

りそな俳句会 (浦和)

麗らかや鳩はくぐもる声を立て

復興の町に幸呼ぶ初燕

「たたいま」と駅は常宿初燕

うらかかやホイップ山盛りパンケーキ

初燕風を躲して半回転

麗かや昼の時報を聞き逃し

麗かや置竿のままとうとうと

珊瑚の会 (浦和)

夜上がりやほぐれんとする藤の房

絶筆の夫の一行藤の花

藤房ののれんに透ける阿弥陀堂

奔放な山藤の房水光る

藤棚と車庫兼用のプロパン屋

白藤揺るるたびわが乳房ひやりとす  
何鳥の巢か水色の命二個  
史代

街路樹に鳥の巢のある地方都市  
山藤の続く峠よ七曲り  
和子

鳥の巢に今は戸袋貸してやる  
鳥の巢や切るをためらふ枝一本  
かつ子

団子食ぶ茶店の庭に藤の花  
節代

たかな俳句会 (川口)  
バステルを以て描きたき春の星  
義子

雲抱く湖面の山や桜狩  
嶺桜地殻変動あるやうな  
鶴城

人住まぬ村にダイヤの春の星  
明日を待つはちみつ色の春の星  
真知子

春星や五線紙にのる愛の歌  
静香

コクーンシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)  
寄合はいつも車座さくら餅  
延昭

ウイルスの話などして桜餅  
沈む日を横一列の葱坊主  
俱子

家業継ぐことを決心葱坊主  
地団駄を踏む子悪い子つくしんぼ  
俊晴

山寺に強訴の謂れ葱坊主  
芽吹句会 (浦和)  
正信

桜餅刀自に老舗の戸の重さ  
ひろこ

鎌倉や雨よぎる間に桜餅  
萩焼の皿の謂れや桜餅  
玲子

春疾風攫つておくれよコ罗纳  
行く春や見舞し友の遠くなり  
千重子

桜餅隅田を渡る風に色  
野ばらの会 (浦和)  
富子

雨の野路人恋しげに濃山吹  
新居へと向かふ荷物や鳥雲に  
栄子

鳥雲に湖面は小さく波立てて  
鳥雲に群れて回旋乱れなし  
和子

小手翳し暫し見送る鳥雲に  
鳥雲に完成問近の聖火台  
治江

鳥雲に入りまた入りて静かなり  
芙蓉句会 (浦和)  
秀子

送迎バス帰路に夕日の暮遅し  
未曾有なり色即是空復活祭  
夏江

すべるごとく行き交ふ舟や夕長し  
土佐みづき花の春日の暮れかぬる  
みき子

「三密」を守りて籠る遅日かな  
けやきの会 (東京)  
道子

桜薬降るさしみて過ぎる乳母車  
新しき前垂れ春の六地藏  
税子

先の見えぬ今の世に降る桜薬  
祥絵  
美子

康世

大宮読売俳句教室 (大宮)

春雷の近くて遠き故山かな  
春雷や雲取山の彼方より  
大吟醸祖父に届ける卒業生  
春雷や熟女ばかりの誕生会  
幅利かすコロナ禍の中卒業す  
卒業の古びたアルバム同窓会  
開会のパイプオルガン卒業式  
苦も楽も今日で限り卒業す  
卒業の代の混沌もアルバムに  
青空に雲幾筋や卒業子  
卒園式先生冥利の絆かな  
骨太の形は父似か卒業子  
寄せ書にあふるる未来卒業す

櫻蔭句会 (浦和)

チュウリップびちびち未来詰めて揺れ  
エール贈る駅前チュウリップ赤  
チュウリップ抱きしめて知るその重さ  
面長の飛鳥大仏春の昼  
チュウリップ閉る力を失ひぬ  
春昼や沼に尺余の魚の影  
チュウリップ子の愛情にふと気づく  
チュウリップ青空のぼる観覧車  
三味の音のまつたり届く春の昼

弘夫 卯の花腐し乾く間のなきスニーカー  
君夫 遍路笠八年越しの霊山寺  
治子 結願寺長き遍路の空青し  
典子 卯の花腐しコロナ籠りをなげきをり  
紀子 折り紙に想ひ出づくり遍路宿  
翔太 卯の花腐し膝の疼きを軽く揉む  
卓郎 うす日差し卯の花腐し光り初む  
徹雄 あゆみの会 (浦和)  
正信 昭和の日余熱で蒸らす強の飯  
サヨ子 川下へ余韻をつたへ花筏  
寛治 風光る孔雀は尾羽根全開に  
順子 風光るカッと口開く仁王尊  
釣りが影絵のごとく風光る  
春夕焼余白残して暮れにけり

眞理 鶴川山百合句会 (鶴川)  
美智枝 校庭にアヒルが三羽春休み  
幸代 卒業と入学の間春休み  
美紗子 自動巻きの止まってしまう春休み  
茂子 鶏小屋当番六年生ある春休み  
由紀子 父と酌む明日旅立ちの春休み  
多美子 黒板に落書きもなし春休み  
公子 春休み紙ひかうきの腕競ふ  
マスミ

啓子 制服の丈直されて春休  
喜代子 下宿屋の二階の静寂春休み  
かつ子 年高のいとこ来てある春休み  
和枝 春休み余白の多き学習帳  
和枝 蝸蚪の会 (浦和)  
倶子 蔓延の病を癒やす春の月  
和枝 春愁やすることもなく髪を切る  
タイ 鯉ぬたり背で押し切る花筏  
和子 虚子の忌にスーパームーン昇りけり  
圭子 春の昼とまつたままの飛行塔  
重子 散る花と名残の雪とふはふはり  
朋子 下り来る紋白蝶や無縁坂  
山遊 青葉の会 (浦和)  
藻好 サイクリング田島が原の桜草  
和 春昼の十字墓より桜島  
山遊 春昼や船漕ぐ爺の鼻眼鏡  
好 茶はこびの人形止まる春の昼  
少少のワインの酔ひや春の昼  
和 枘酒の枘干す飲屋春の昼

千春 制服の丈直されて春休  
萬蝶 下宿屋の二階の静寂春休み  
理恵 年高のいとこ来てある春休み  
玲子 春休み余白の多き学習帳  
宣子 蔓延の病を癒やす春の月  
元美 春愁やすることもなく髪を切る  
礼子 鯉ぬたり背で押し切る花筏  
さち子 虚子の忌にスーパームーン昇りけり  
鶴城 春の昼とまつたままの飛行塔  
るみ子 散る花と名残の雪とふはふはり  
月を 下り来る紋白蝶や無縁坂  
美子 サイクリング田島が原の桜草  
和子 春昼の十字墓より桜島  
啓子 春昼や船漕ぐ爺の鼻眼鏡  
公子 茶はこびの人形止まる春の昼  
洋子 少少のワインの酔ひや春の昼  
輝翠 枘酒の枘干す飲屋春の昼  
月を 春暦インクの消せるボールペン  
徹太 行く春の後ろ姿を勿来まで  
朱の紅の女船頭山桜  
春の行く太極拳のテンポかな  
鶴城





風 声

○俳句界四月号——「作品6句」欄

「南禅寺界隈Ⅵ」と題する網野月を氏の六句

春の雪しほりの手絡にて融ける

手曳かれる幼は舌を春の水

治まりて頭の上を春の水

花未だ路面電車は地下鉄に

あのそのこのちよつと門桜

八分音符は付点音符に散るさくら

○現代俳句四月号——「現代俳句の風」欄

砂擦りて舟を押し出す花曇り

をとこ嫌ひもときにはさみし夜半の春

羊水に浮かぶ心地や春眠し

風の笛鯨場の鳶を裏返す

○現代俳句四月号——「新入会員記念作品」欄

ぼつぺんは小樽の漁師のみやげもの

聞こえ来る背伸び始める霜柱

○天塚（宮谷昌代主宰）三月号——「珠玉一句」欄

荒神の杜も覚めたか初明り

○くちら（中尾公彦主宰）四月号——「受贈俳誌美術館」欄

上枝の鶯をよぶ五色豆

○太陽（柴田南海子主宰）四月号——「一誌一耀」欄

小鼓を締むる弓手も寒稽古

○菜の花（伊藤政美主宰）四月号——「諸家近詠」欄

帯の鳴る気付け教室春近し 鬼之介

○新月（松田碧霞代表）四月号——「受贈俳誌紹介」欄

一月や蒔絵の箱に夜叉の面

○天穹（屋内修一主宰）四月号——「受贈俳誌より」欄

一月や蒔絵の箱に夜叉の面

○草笛（太田土男主宰）四月号——「受贈誌一詠」欄

神の名を読めぬ者どもはつまうで

○好日（高橋健文主宰）四月号——「受贈誌御礼」欄

帯の鳴る気付け教室春近し

○鳩の子（柴田多鶴子主宰）四・五月号——「受贈俳誌御礼」欄

帯の鳴る気付け教室春近し

○風樹（豊長みのる主宰）四月号——「現代俳句月評」欄

古藤みづ絵氏が鬼之介主宰の一句を鑑賞

綿飴を春のゆやけが包みこむ 鬼之介

「綿飴」と「春のゆやけ」のマッチングの絶妙さ。

綿飴とともに「ゆやけ」も口中にふふみつつ…

○笥（山本一步主宰）四月号——「受贈誌の一句」欄

空白の日いとほしく古日記

飛永 鼓

（日高徹抄出）

## 水明発展基金御礼 (敬称略)

— 令和二年四月三十日現在 —

井上	玲子	10	口	田中	タイ	6	口
日高	徹	5	口	橋本	京子	3	口
吉永	興子	2	口	松尾	幸子	10	口
丸山	マシミ	5	口				
町野	広子	5	口				
				— 合計	46	口	—

### 誤植訂正

五月号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

十頁 下段二行目

誤 鰯雲鯖雲空を満たしたり<sup>x</sup>

正 鰯雲鯖雲空を満たしけり<sup>o</sup>

## 水明夏行のご案内

例年どおり水明夏行を開催します。午後の時間帯で浦和駅すぐ近くの会場です。参加受付は当日会場で行います。

大勢の皆さんの参加をお待ちします。

**【日 時】** 令和2年7月29日(水)・30日(木)・31日(金)  
午後1時～5時

**【会 場】** JR浦和駅東口「浦和パルコ」10階  
浦和コミュニティーセンター  
29日(水)…第13集会室 30日(木)…第14集会室  
31日(金)…第13集会室

**【参加費】** 第1日～第3日を通じて 3,000円  
(1日参加の場合は 1,000円)

研 修 部

## 後記

三月二十三日の朝苦しさに目が覚めこれ以上の我慢は限界で入院となる。人生には何が幸ずるのか分からないが、もう二三日遅かったら入院どころか命の方が危なかったら診断され六十日間入院。その間コロナの感染拡大で世の中の混乱がピークになって来て退院どころか家族と面会も禁止されてしまった。

水明の行事、句会やらどうなるか気になったが、句会場が閉鎖になつてしまい、90周年の大会も十一月に延期せざるを得なかった。病室の小さな机で原稿を書くのもこれが最後だと思ふ。しかし通信投句の原稿が病院に送られてくると、本当に句会をやっているような気がしてとても楽しかった。それが、私の生きる力になつたような気がする。

水明誌も毎月発行され、これは鬼之介主宰の力強いリードがあればこそと感謝申し上げたい。そして編集、総務、行事各役員の方々

本当に感謝申し上げます、今日二十一日退院しました。(順子)

わが家には多肉植物が色々あるのだが名前は何もない。特別好きな訳ではないが何となく集まつてしまつた。単に多肉植物と云つても分類、種類など沢山ある。同じ様な葉肉から花の形大きさ咲き方に違いがあつたりしてそれによつても違ふらしい。でも植物は正直ものだから最低の世話でも元気が季が来れば美しく咲いてくれる。壺に入れたり吊るしたり鉢植えにしてたり色々な楽しみ方が出来るので楽しい。

今年もわが家の庭には、白と紫の立浪草が沢山咲いている。庭木のアブチロンの猩猩花は例年になく花がびつとり付いた。果物なら鈴生りと云う所である。主張のしすぎは綺麗ではあるが美しさに欠けている感。女の人が口紅を塗るのは「女は魔物」だから。魔物は口から入るので、口紅を塗つて魔性から難を逃れるとの説あり。

全国の赤い花よ沢山咲いてコロ

ナウイルスを退治して！(和子)  
「紗一の好きな風知草」

今年も又風知草が鉢一杯に茂つた。若緑の葉がさらさらと美しい。玄関の方へ鉢を移しながら、ふつと口に出たというより、心に浮かんだのが冒頭の言葉である。どこかで聞いたフレーズだなと思つたら「亭主の好きな赤鳥帽子」だ。これはあまり良い言葉ではないが、風知草の方は、紗一先生が本当に好きで、玄関に二鉢置き太郎と花子と名付けて楽しんでおられた。お掃除のお手伝いに毎週来ていた姪御さんが、風知草が枯れたので庭の隅の方へ持つて行つたら、「枯れは枯れでいいんだから」と叱られちゃつたと、首をすくめていたのを思い出す。

六、七年前の夏季競詠の兼題に「片白草」が出た時、福田籐十郎氏が熊谷から水明発行所に、片白草を一抱えも持って来てくださつたのを頂いた。それが、毎年我が家の庭に芽を出す。今年もあちこちにぼつぼつと楽しい。(和葉)

## 水明

令和二年六月号

通巻一〇七七号

令和二年六月一日発行

発行人 山本 鬼之介

〒330-0073 さいたま市浦和区野町一七二一八  
電話 048-886-1600三

発行所 水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区野町四一〇二二  
電話 048-822-1474一

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇〇〇一五三三九三

印刷所 中央美版



# 季音抄

山本 鬼之介

鳥・虫・人叫びたくなる山櫻  
乱れ髪の傀儡の笑まふ春の宵  
陽炎の土中で焦ぐる火打石  
桜餅刀自に老舗の戸の重さ  
俊寛の小さき奥つ城鳥雲に  
花吹雪会津はいまも城を守る  
薫風やひしほの匂ふ城下町  
春野ゆく名のみ遣りし小町井戸  
お忍びや枝垂桜に匿はれ  
春祭禊の海のほんだはら  
赤赤と水は火を練る水送り  
三味の音のまつたり届く春の昼  
開ききりもはや戻れぬチューリップ  
春装は貝紫の恋ごろも  
春の雪明かりにひらくリルケの詩  
初蝶の一通な動き吾も立てり  
巢燕の客に馴染みし無人駅  
まほろばの大和は今し紫雲英の田

大橋 廼代  
大村 節代  
栢尾さく子  
菊池ひろこ  
五明 昇  
境 延昭  
田寺 玲子  
柚木 治子  
小倉 倭子  
鳥羽 和風  
宇田 白鷺  
丸山マスマ  
松井由紀子  
梅澤 佐江  
井上 玲子  
原田 想子  
松宮 保人  
野平美紗子

次の原稿を募ります。随時発行  
所宛、ふるってお寄せください。  
なお掲載については、編集部にお  
任せねがいます。

## ▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽  
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内

(句に雑誌名、句集名、刊行月  
を付す)

## ▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起  
きた面白い話題、めずらしい経験  
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内

(題をつけて)

## ▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

# 水 明 抄

山本 鬼之介

丸めたる紙の匂ひや光悦忌  
 臙なる稜線後に発車ベル  
 芽柳や銀座の母は今いづこ  
 那須おろし避けて寄り添ふ壺すみれ  
 足下に小さな宇宙下萌ゆる  
 疎ましや連理の枝も梅の夜も  
 皮衣プライド高きハイヒール  
 一輪車を漕ぎだす少女たんぽぽ野  
 明年を約して雛の面被ふ  
 高遠の山盛り上ぐる桜かな  
 蔵町に蛇の目があふ春の雨  
 つくしんぼ今年も確と線路みち  
 ヒヤシンス美貌の猫と出窓かな  
 土手に佇ち春満月の利根有情  
 馬刺には蒜醬油球磨焼酎  
 良き事の子感ふつつ初音かな  
 崖に咲く菫ふるはす光かな  
 鳥帰り湖畔に残る餌の箱

青木 鶴城  
 野田 静香  
 日高 徹  
 渋谷きいち  
 越田 栄子  
 正木 萬蝶  
 保坂 翔太  
 曲淵 徹雄  
 原田 秀子  
 大塚 茂子  
 熊倉千重子  
 河野はるみ  
 宮崎チアキ  
 神田 治江  
 近藤 徹平  
 飛永 鼓  
 秋本カズ子  
 秋山 紅花

句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中美どり 太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	新宿区大久保 ルノアル	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤江 河野はるみ
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋 勉 代	森本早苗
婦人句会	第3月曜・午後1時	水明発行所	山中 順子	西山貴美子
若松句会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	菊池ひろこ 石田慶子

## 水明例会案内